chaos――

クイックロッド

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ｃｈａｏｓ――

【Ｎコード】
Ｎ１９３２Ｊ

【作者名】
クイックロッド

【あらすじ】
『ｃｏｒｄ　ｎｕｍｂｅｒ－０８』の登場人物、カオス。
ベガが活躍する裏で、彼は何をやっていたのか――。

少年を基点として広がる、最高最悪の混沌
《カオス》が幕を上げる……

――――――現在は「祭合旅行編」。　詳しくは、活動報告を参照

1：プロローグ

アッフリクで起きた争い――。
カオスは『グレイブ』から追放され、命を狙われる立場となった。
辛うじてウィルスと融合する事でジャミンガーとなり、その場を脱出――。
だが、元いた『グレイブ』を追い出され、更にはアッフリクでの争いにも巻き込まれる事となる。

『ゼロラグナ』所属、ベガと間接的に協力する事によって、双方が危機を脱出。
カオスは『星流小学校』の抹殺者達が使用したジェット機に乗り、ニホンへ帰還。

そこから始まる、最高最悪の混沌（カオス）。

2：　ＷＡＸＡの交渉

アッフリクでの戦いが始まる数分前。
ＷＡＸＡ、ニホン支部の長官の下に、一人の男が来ていた。

その名も――ギャラクシー。

常に世界を乱し続け、混乱を招く人物。
５０年前には戦争を起こし、英雄である流星スバルの死因を作っている。

そんな彼が、長官の下にやって来たのだ。

ギャラクシーの噂をチラホラと耳にしていた長官は何が起きているのか、即座に察した。
だが、抵抗する術は無い。

瞬間的に透明な剣を突きつけられ、脅すようにこう言われたのだった。

『……君はどうやら、政府を倒そうとしているらしいね。　安心しろ、私は政府を利用しているだけだ……君が政府を潰そうとするなら、邪魔をするつもりは無い』

長官の顔には疑問ばかりが浮かぶ。
『危険な男』、それがギャラクシーへの認識だったからだ。

「し、しかし……」
『だから言っているだろう？　私は政府を利用しているだけだと。

向こう側が勝手にメリットを見出しているだけだ……そして、用済みになった後は潰そうと思っている』

そこで、ようやく事態を察した。

ギャラクシーが何を言おうとしているのか、鈍った頭で考える。

『わざわざ、自分の手で潰すのもメンドーなのでな……君たち、WAXAニホン支部に協力してもらおうという考えだ』

更に区切り、早口で続ける。

『君たちは政府を潰したいんだろう？　そして、その潰し方は曖昧だ』

「だが……政府側とあなたは協力している。　だから、ベガを殺し、あなたを怒らせる事で――」

『――私に、政府を潰させようとした。　なるほど、面白い考えだ。　政府の管理下にあるWAXAがベガを殺した事により、管理する側である政府に私は憤る。　面白い考えだぞ、本当に……だがな』

ギャラクシー特有の笑みを浮かべた。

『私が、WAXAの動向を見ていないとでも？　君たちが政府を潰そうとしているのは、とっくのとうに知っていた……政府を潰し、国の主導権を握ろうとしていたのも知っている。　だから、ベガを殺された場合は君たちが滅びる運命にあるのだよ』

長官の顔が引きつる。

既に、抹殺者を仕向けた後だ――今ここで、殺されるのかもしれない。

恐怖が、じわじわと長官を蝕んでいく。

『だから、ベガを殺す意味は無いだろう？……なぁに、お前がよこした抹殺者ごときで、ベガは倒れやしない。　だから安心しろ……さて、取引だ』

そこで一枚の写真を取り出した。
そこに写っているのは、一人の少年。

『政府を潰したければ、私の命令に一から十まで従え。　いいな？』

静かに長官は頷く。
政府を潰す為なら、誰の犬にでもなるつもりなのだ。
それほどまでさせる、何らかの理由が長官にはある。
国を支配してまで成し遂げたい事が、長官にはある。

『……写真に写っている少年は、今現在アッフリクにいる。　星流小学校からやって来たジェット機……あれのパイロットに、この写真を渡せ。　そして、その少年が来た場合は、何としてでもジェット機に乗せるように伝えろ』

写真を長官に渡し、ギャラクシーは笑顔を引っ込める。
それと同時に、首元に突きつけていた剣を放した。

『……今日の命令は、これで終わりだ。　今後、また協力してもらう事があれば――君の下に現れよう』

その一言を放ち、ギャラクシーは消えてしまった。
長官はそれに驚きながらも、歓喜と恐怖に支配される。

政府を潰せる確立が上がった歓喜と、ギャラクシーに対する本能的な恐怖。

だが、長官は知らなかった。

ギャラクシーと関わる事によって、混沌が幕を上げる事を――。

2：　WAXAの交渉（後書き）

今回は、カオスが何でジェット機に乗り込めたのか……という補足的なモノですね。

3：　乗った理由

「……何でこうも簡単に、俺を乗せた？」

静かに尋ねる。

パイロットはよそ見すらせず、簡潔に答えただけだった。

「……雇い主から言われてるんだよ。　お前を乗せろって」

それだけ言うと、再び沈黙を守る。

カオスは怪訝な顔つきでそれを見つめた後、扉を閉める。

そのまま元の席へと通じる通路を、静かに歩いていった。

ちなみに、普通なら機内で立ち歩いたら倒れてしまう。

何せ、ニホンからアッフリクまで一時間という、化け物並みの速度を誇るジェット機なのだから。

なら、何故カオスは倒れないのか――理由は簡単だ。

ウィルスと融合し、ジャミンガーとなっている。

その姿ならば、電波を利用して尋常じゃない速度にも抗える。

パイロットがその姿を見れたのは、言うまでもなく……一般的に普及した、電波を見るバイザーのおかげだ。

3：　乗った理由（後書き）

今回は訳あって短いです……。
いや、訳といっても、乗せてもらった理由をカオスが知る必要があったってだけなんですが……。

4：　デンパくん

「……チッ」

思わず舌打ちしてしまう。

『星流小学校』から来たジェット機なのだから、これぐらいは予想しておくべきだった。

ジェット機は、『星流小学校』の屋上へと向かっている。

あの校舎へと向かうとなると、嫌悪感しか出てこない。

嫌な思い出とトラウマが凝縮された場所、それこそが『星流小学校』だ。

重力がおかしくなるような、不思議な感覚に襲われる。

それが、到着の合図だった。

――――――――

校舎の中に居る必要もない、というより居たくない。

そう判断したカオスは、ジャミンガーとなって外に出ていた――とはいえ、大分アウト・ブラッディの姿に近づいてきているのだが――。

『アンチウェーブ』の破壊活動によって荒らされたニホンだが、国家規模のリアルウェーブ発動により、各地の被害は消滅していた。

国一つをリアルウェーブで復旧するような時代なのだ……最新鋭の科学がどんなモノなのかを考えると、溜息が出てしまう。

と、そこでカオスは辺りを見渡した。
かつての故郷……そして、かつての家があった場所だ。

カオスの母親は自殺、父親は事故死している。
その為、家はもう無いのだが――。

跡地という形で、町の一角にそれはあった。

かつての家、かつての故郷。
平らな地面同然となり、家が無くなろうとも――家であった事に変わりは無いのだ。

呆然としていたカオスだが、即座に首を振る。
自分はもう、元には戻れない。
犯罪組織として破壊活動を行い、法律を散々無視してきた。

挙句の果てには、『殺人』という罪を何度も背負っているのだ。

こんな人間に、故郷を懐かしむ資格は無い。

立ち去りかけたカオスだが、何かと衝突した。
見れば、一体のデンパくんが――。

『あっ……す、すいません』
「……」

デンパくんの顔には痛々しい傷があり、そこから粒子が飛んでいる。

体には青黒いラインが二本走っており、個体ごとの違いを表す印となっている。
頭部には黄色い羽根が三本付けられており、デンパくんなりのファッションが伺える。
だが、傷のせいでそんなモノは目立っていない。

「……何なんだ、その傷は……？」
『――な、何でもありませんよ』
即座に返答するが、傷は消えてくれない。
膨大な粒子が飛び散り――デンパくんにとっては、だが――デンパくんは今にも倒れそうな状態なのだ。
カオスは一言掛けようとしたが、それよりも早くにデンパくんが告げる。

『そ、それじゃ……』
「待て」
小さいデンパくんの体を引きとめ、顔を覗き込む。
ビクッとなるデンパくんだが、カオスはお構い無しだ。
「名前は？」
『へ、ヘルプです……』
「あれだな、極端な名前だ。　傷からして、助けてくださいって言ってるようなもんなのに――名前までそれだ」

『い、いや――助けてくれなんて……』

「で？　何の事件に巻き込まれたんだ？」

デンパくんを放したのが間違いだった。
慌てた様子でデンパくんはウェーブロードに飛び乗ってしまい、そのまま高速で去っていく。
それを見つめたカオスは、唖然とするばかりだった。

「……凄い逃げ足だな」

あるのはただ、『呆れ』という感情のみ。

5：　住み込み

「まぁ、良しとしよう」

カオスは部屋を見渡し、静かに呟いた。
ここはアパートの一部屋――。
どうやら、ここに住んでいた住人は夜逃げしたらしい――借金を抱え込んでいたか、家賃が払えなくなったか……そのどちらかだろう。
家具が一通り揃っており、乱雑に置かれている。
前までは『グレイブ』のアジトに住んでいたカオスだが――アジトといっても、住宅用のスペースがあり、住み心地もかなり良かった――『グレイブ』から追放された事により、住む場所が無くなってしまった。

だからこうして、人のいない家に片っ端から入っていっているのだ。
電波人間の存在が公にされたこの時代。
セキュリティは電波人間にも対応し、中に入れないようになっている。
なら、何故カオスは部屋に入れたのか……理由は簡単だ。
ジャミンガーだからである。
電波人間のみに対してセキュリティが行われている為、こうして用意に入れる。
それに、絶滅にほぼ近いジャミンガーへの対策など、行う訳がない。

ちなみに、『グレイブ』から金はたんまりと貰っている為、金銭的な面での苦労は無い。
カオスはソファに腰掛けると、先程買った水に口を付ける。
ここで水道やら何やらを使ったら、勝手に住んでいる事がバレてしまう――。

そう考えたカオスは、市販の水や弁当で腹を満たしていくと決めたのだ。

ふとハンターを覗いてみれば、アップリクで『ライトポリス』の一員が反乱を起こした……などとニュースが流れている。

当然、そんな事に興味が無いカオスは、即座にハンターの画面を切り替える。
そこに映ったのは、地図だった。

「……ここら辺の地理とかも、知っておかないとな……」

6：　助け

「――、チッ」

どうやら、寝てしまっていたようだ。
既に時刻は午前８時――。
朝日が、窓から差し込んでいる。

寝違えてしまったのか、痛む首を押さえながら起き上がる。
近くにあった市販の水を飲み込むと――昨日買ったやつなので、美味しいとは言い難かったが――ハンターを装着し、ジャミンガーとなって外に出る。

人間の姿で玄関から出れば、十中八九空き巣らしき事をしたのがバレてしまうだろう。
せっかく手に入れた住居を、手放すつもりは無い。

ウェーブロードに乗り、そんな事を考えていたのだが――。

『おぶろぶゥッ！？』
「はッ！？」

カオスと足元にいる何か、が訳の分からない声を上げ、衝突した。
カオスは即座に足元を見下ろし、その正体を知る。

「……てめぇか、ヘルプ」

そこにいたのは、昨日出会ったデンパくんだった。
相変わらず傷口からは粒子が溢れ――大分、傷は癒えているようだ

が――三枚の黄色い羽根を頭に付けている。
個体別認識をする為の青いラインが、胴体に走っていた。
ヘルプはわたわたと腕を振り、お辞儀のような体制を作る。
それを見たカオスは、今度こそ尋ねた。

「何に巻き込まれてる？」
『……、な、何でも――』

「恍けるな。　そんな傷負っておいて、何が「何でも無い」、だ……何があった？　言ってみろ？」

自分でも、何でこんな事をするのか分からなかった。
『グレイブ』の幹部として、冷酷に徹してきたハズだ。
復讐者として、力を追い求めてきたハズだ。

それを、今更どうしようというのだ？

『……（もしかしたら、この人なら――）』

ボソボソと何やら呟いていたヘルプは、ようやく顔を上げる。
その表情は、何とも形容しがたい――複雑なモノであった。

『……生贄って分かりますか？』
「ああ、……何らかの命を犠牲にして、何かする奴だろ」

酷く曖昧な答えだが、ヘルプは頷いてみせる。

『僕が勤めているのは、ＷＡＸＡのニホン支部なんですが……何やら怪しい実験をするらしく、デンパくんを数体生贄――ってか、実

験台にするつもりなんです。　僕たちの長、キング・ルーツも「これは仕事だから、喜んで行って来い」って言う始末だし……怖くて、逃げ出したんです』

「なるほど、な」

そう言ったカオスの表情は、ヘルプ同様複雑であった。
再び彼が口を開いた時には、自然と言葉が出ていた。

「……案内しろ。　ブッ殺してやる」

今日、確実に何かが変わろうとしていた――。。

7：　実験

『こ、こ……です……』

怯えているのか、それとも戦慄しているのか。
どちらかは分からないが、ヘルプの声は震えている。
カオスはヘルプの声に従い、遠くを見つめる。

ここはフジ山――電波人間とデンパくんにとって、これぐらいの距離はどうって事無い。

そして、ヘルプが指差した先にあるのは、一つのワープホール。
とてつもなく膨大な量のデンパくんの周波数を感じる訳だが――。

カオスは溜息を付く。
相手がデンパくんとはいえ、寄ってたかって攻撃されたらさすがにデリートされてしまう。
『集団』というのは隙こそあるが、こういった所が恐ろしい。

「チッ……実験を行ってる奴らは？」

なら、勝機のある方に行くしかない。
ＷＡＸＡ相手――つまり、ウィザード相手というのと同然だ――なら、集団は働かない。

『……え、と……その……』
「……んだよ……あの中かよ……」

ヘルプの動向から察したのか、カオスは盛大に溜息を付いた。

だが、ここまで来たからには仕方が無い。

「……勘違いするなよ、クソデンパ。　俺は暇潰しとしてこれをやってるだけだ」

それだけ言うと、ワープホールへと足を踏み込む。

『集団』が働く、デンパくんの本拠地へと。

そして、恐らくは――ＷＡＸＡの研究ウィザードも、そこにいる。

――――――――

デンパスクエア――そこには、キング・ルーツと呼ばれるデンパくんの長ともいえる存在がいる。

同時に、デンパくん達の総本部でもある。

メールの配達、テレビやその他の電波を運ぶ役割――それらの仕事がこちらへと回され、キング・ルーツの指揮の下で仕事が進んでいく。

一方、彼らは『奴隷』としての意識も心得ている。

自分は人間に尽くす『奴隷』なのだから、自由を追求してはいけない……、と。

決して表には出さないが、心の奥底にはそういった感情が根付いている。

その為、『ＷＡＸＡ』から極秘裏の実験を頼まれようが、断る事は

しなかった。
その実験でデリートされていったデンパくんは三十体にも及ぶ。
そして今日、再び実験は再開される。
元々は『何か』を見つける為、実験を繰り返していたようなのだが
――その『何か』を持っているのがヘルプだと判明した。
その為、実験の披験者となる事が確定。
だからこそ、ヘルプは逃げてきた。
だが、そのヘルプに逃げられたのではどうしようもない。
『ＷＡＸＡ』は一億分の一の確立で見つかるといわれる、その『何か』を再び実験によって見つけようとしていた。
実験内容――あまりにも冷酷で、残酷な実験だ。
デンパくんの体内には、『中核』……つまりコアがある。
『アビリティ』と呼ばれるモノをデンパくんは生成するが、それはこのコアから漏れ出した電波がデータとなったものだ。
そして……コアには膨大なアビリティが秘められており、『ＷＡＸＡ』の研究ウィザードはデンパくんをデリートするなり、コアを取り出し……求めている『何か』なのかどうかを判定。
もしも違うなら、ゴミのように捨ててしまう。
こういった行為が、一ヶ月間にも渡って繰り広げられている。
だが、デンパくんは文句を言わない。
ヘルプのように逃げ出したデンパくんも大勢いたが、ここに残って

いるのはそういった逃げる意思が無い者達だ。

実験などやりたくはない、しかし……人間に逆らう訳にはいかない。

そういった地獄が、デンパスクエアで繰り広げられている。

8：　特攻

『……異常無し。　これより実験を開始する』

それと同時に、周囲のデンパくんの向きが変わる。
真ん中に位置する研究ウィザードから、背を向けるように。
そして、研究ウィザードの足元には一体のデンパくんが固定されている。

『固定』、というのは拘束だ。
電脳の地面から飛び出た電波拘束機械がデンパくんをガッチリと捕まえ、逃げられないようにしている。

これも仕事だ、と無理やり自分を納得させ、デンパくんは目を瞑った。
研究ウィザードは何やらご大層な機類を使い、デンパくんの様子を調べていく。

『……周波数、正常。　アビリティ……『ウェポン』に分類されるモノ。　では、解剖へと移る」

今度こそ、電脳中が悲痛な空気に満たされた。
キング・ルーツと研究ウィザードのみが、その場を見つめる。
研究ウィザードが手に持ったのは、細長いドリルのような武器だった。
槍のような棒の先端に、丸い刃が付いている。
銀色の武器を研究ウィザードが構え、そして……無表情で振り下ろした。

だが、それはデンパくんを貫かない。
何故なら、バォオオン！　という轟音と共に、研究ウィザードに向かって紫の弾丸が打ち込まれたからだ。
銀色の武器が中を舞い、電脳の海へと――つまり、電脳の外へと――落ちていく。
周囲は音で何が起きたか気付いたのか、即座に振り向く。
研究ウィザードは「訳が分からない」、といった様子で立ち上がる。

それと同時に、デンパくんの戦闘部隊が展開した。

そこに、全くの無防備で――シャープな体付きをしたジャミンガーが、ゆっくりと歩いていく。
いや、それだけじゃない。

彼の足元には、ビクビクと震えるデンパくんもいる。
それを見たキング・ルーツはただ叫んだ。

『ヘルプ！　お前！！』
「……お前がデンパ共の長か。　悪いが――、潰させてもらうぞ」

――――――

悲鳴が轟く。
『恐怖』という本能に染められた人間は、ただ逃げようとして。

それでも、逃げ道を絶たれて。
生存本能に抗えず、立ち向かって。

銃殺されていく。

電波変換するまでもなかった。
このくだらない任務は、初仕事してはぴったり……『国家的秘密組織』に関しては素人の自分だ。
これぐらい簡単な任務の方が似合っている。

それにしても、何だコレは。

言葉で相手の精神に働きかけただけで、すぐこれだ。
恐怖に踊らされ、ただ逃げる。

はぁ……、と場違いな溜息を漏らした。
近未来的な銀色の銃を握り、周囲へと目を走らせる。

ウィザードはデリートされている。
そして、研究員達も十人程度しか残っていない。
デンパスクエアでは死闘が繰り広げられている、らしいが。

『ＷＡＸＡ』と『サテラポリス』が五十年前のようにくっ付いていないのは有難かった。
何せ、『サテラポリス』が近くにあったら、こうして楽に仕事を進める事も出来ない。

政府側の申し出によって『ＷＡＸＡ』の長官はわざわざ警備を手薄にし、自分をここまで通した。
この研究員達はそれすら知らず、ただ殺されていく。

最も、……『サテラポリス』が近くにあった場合、政府の干渉如きでどうなるものでもない。
『サテラポリス』の連中は馬鹿な正義感の塊だ。

政府から「テメェらの仲間を殺すから、道開けろボケ。　さもなければ、テメェらの財産全部取り上げて、給料停止すんぞ、オラ」と脅されようが――こんなヤクザみたいな言い方はしないが、結局このような事を超絶丁寧に言っているだけだ――『サテラポリス』は仲間を見捨てない。

自分の給料がなくなり、仕事を奪われ、路頭に迷うことになっても。
『サテラポリス』は馬鹿正直に仲間を助ける。

だが、この『ＷＡＸＡニホン支部』は違う。
五十年前の長官が今も現役だったら、仲間を馬鹿正直に救っていただろう。
だが、今の長官は違う。

その証拠が、自分の前に転がる死体だ。

静かに少年は耳にある通信機へと呟く。

「……で、どうなの？」
『……そうだな。　奥にメインコンピューターがあるだろう？　長官に干渉し、鍵を開ける事には成功している。　だから、勝手に入れるはずだ。　そこから『Ａｂｉｌｉｔｙ|Ｕｌｔｉｍａｔｅ』とやらのデータを消去しろ――いや、ハンターか何かにコピーした後で消せ。　『コチラ』側の拠点でそのデータを調べ上げる』

「はいはい」

ピッ　という小気味よい音と共に、通信が切断される。
十人程度の研究員達はそこら辺で固まっていたが、少年はそれを無視する。

奥へと進むと、扉を蹴り開けた。
確かに感じる、この奥にメインコンピューターとやらがあるのが。

「さて、と。　とっとと『闇負陣（ダークネス）』から抜け出してギャラクシー様に報復したいし……『ノルマ』である『一億件の任務成功』を『九千九百九十九万九千九百九十九件の任務成功』へと減らそう」

『闇負陣（ダークネス）』所属、心野幻真（しんやげんま）は『目的』への第一歩を踏みしめた。

9：　デンパスクエア　1

デンパくんの本拠地へと。
彼は一体の仲間を引き連れ、現れた。

状況が理解できず、キング・ルーツが顔をしかめる。
だが、それよりも早くデンパくん達が動いた。

カオスを敵対者と見なし、それぞれがアビリティを駆使した攻撃を放つ。
中には武器を持ってカオスに飛び掛る者もいる。

相手がデンパくんとはいえ、集まれば膨大な力となる。

事実、カオスへと放たれた攻撃は電波人間を一撃でデリートする程の威力だ。

対応が遅れているヘルプの首を掴み、横へ跳ぶ事で攻撃を避ける。
続いて百以上のデンパくんが飛び掛ってくるが、ダークソードで迎撃する。

とはいっても、近くにいた二体を気絶させた程度でしか無い。

背後に回っていた三十近くのデンパくんが共同で衝撃波を生み、カオスへと放つ。

「ぐっ、がぁぁぁぁっ！？」

背後からの不意打ちに対応できず、カオスの体は奥へと吹っ飛ぶ。

遠距離攻撃を行っていたデンパくんの集団へと突っ込み、視界が揺れる。
突然突っ込んできた為か、遠距離集団は焦っていたが、すぐさま冷静さを取り戻す。
遠距離を近距離に切り替え、弾丸で打ち抜こうと構える。
だが、カオスの方が早かった。
ふらつく視界を無視し、頭に走る激痛を無視し、起き上がる。
戦闘慣れしていないデンパくん達はそれだけで焦り、さっと飛びのく。
カオスが入り口付近を見れば、ヘルプが取り残されていた。
そこに、捕獲をしようとソードを構えた近距離部隊が近づいていく。
ヘルプは怯えていて、逃亡どころではない。
チッ、とカオスは面倒そうに舌打ちすると、ウェーブカードを転送する。
「３６０アティック！！」
メガクラスカード――全方位へ衝撃波を飛ばし、攻撃を与える。
全方位へ散らばる為、威力こそは劣るが――それでも効果的なのには変わり無い。
やはり戦闘慣れしていないデンパくん達は逃げ惑い、遠距離攻撃部隊はバラバラになってしまう。
カオスはその間を縫うように高速移動し、近距離攻撃部隊へと迫っ

ていく。

それに気付いたデンパくんの一人がソードを構えるが、カオスのダークソードによって地面に倒され、そのまま気絶する。

驚愕する近距離攻撃部隊を力ずくで吹き飛ばすと、ヘルプを掴む。そのまま左へ放り投げると、手短なデンパくんへ斬撃を加える。

がっぁ……、という声と共に、斬撃を加えられたデンパくんが気絶した。

ヘルプは近距離攻撃部隊も、遠距離攻撃部隊もいない所へと投げてい置いた。

カオスが敵を引き付けている限りは、狙われる心配は無いハズだ。

電脳の奥を見れば、キング・ルーツは研究ウィザードの防衛に徹していた。

緊張を抑え、カオスへと近距離攻撃部隊が飛び掛る。

ニ、三体が飛び出したのをきっかけに、数十体が続けざまに飛び出した。

だが、しょせんは戦闘慣れしていない集団。

３６０アティックによって気絶してしまう。

それを見た、控えていたデンパくん達が後ずさる。

戦闘慣れしていないが故、恐怖を感じているのだ。

その恐怖に付け込むように、カオスは空中へキャノンを放つ。

それが決定打となった。

近距離攻撃部隊のデンパくん達は悲鳴を上げながら逃げ惑い、攻撃されないように隅で固まってしまう。
カオスはそれを見て、溜息を付いた。

戦闘慣れしていないデンパくんが戦うと、こうなってしまう。
彼らを戦わせるべきではない。
デンパくんはそこら辺のウィルスよりも弱いのだから、通常は守られる立場にあるべきなのだ。

それを、ＷＡＸＡの連中は戦わせた。
自分を守らせる為に、守られるべき者を戦わせた。
守るべき立場の者である研究ウィザードは、平然と守られている。

カオスの中で、何かが切れていた。

遠距離攻撃部隊も先程の攻撃で怯えきってしまい、脇に退いている。
ヘルプも入り口付近ですくみ上っており、動こうとしない。

「……、オイ」

攻撃態勢に出たキング・ルーツの背後にいるソイツへと。

「てめぇ……」

キング・ルーツなど無視して。

「……デリートされたいのか？」

研究ウィザードの表情は揺らがない。
ただ、こう言っただけだ。

『キング・ルーツ、奴を拘束しろ。　私にはデリート命令の権限が無い。　侵入者を拘束する権限しか無いのでな。　拘束した後はサテラポリスにでも引き渡せばいい』

冷めた口調で。
守られるべきデンパくんの長へと、ただ言った。
それと同時に、キング・ルーツが飛び出す。

10：　デンパスクエア　2

デンパスクエア。
フジ山にあるこの電脳内で、デンパくんの長であるキング・ルーツと元『グレイブ』の幹部、混天カオスの戦いが幕を開けた。

キング・ルーツの体が示すとおり、彼の電波情報量は巨大。
それ故、実力も通常の電波人間相手なら圧倒するぐらいにはある。

対するカオスは、ウィザードがいない為、かつての実力を失っている。
ウィルスとの融合体であるジャミンガーの周波数にもあまり馴染めていなく、実力を存分に発揮できていない。

結果は分かりきっている。
だが、カオスは止まらない。

無謀な戦いをキング・ルーツへと挑む。

キング・ルーツとカオスが飛び出し、互いに交差した。
瞬間、キング・ルーツが己の電波情報量を利用した砲撃を放つ。

不意を突かれたカオスが吹っ飛び、悲鳴を上げる間もなく次の砲撃が炸裂した。
色とりどりの閃光が辺りに舞い、カオスの体が更に吹き飛ばされる。

「ぐっ、がっ――」
『ぷ？　単身でこのスクエアに乗り込んでくるから……てっきり強いと思ったんだぷが……期待はずれだったぷね』

ぎりっ……、とカオスの歯が音を立てる。
侮辱された事への怒りか、それともデンパくん相手に傷を負わされた事への恥から来る音なのか。
それは分からない。

だが、これだけは分かる。

どんな状況になろうとも、カオスは立ち上がると。

『……そうぷね。　そちらにも事情があるみたいだし、こりゃあ……全面対決突入、ぷ――覚悟しろ』

急激に、キング・ルーツの醸し出す雰囲気が変わる。
デンパくんを束ねる長の役割を、果たすべく――キング・ルーツは侵入者に対し、牙を剥く。

『……算出。　侵入者の情報を、一連の行動データから計算するぷ』

キング・ルーツの大柄な体から、一筋の電波情報が流れていく。
それはディスプレイを象り、キング・ルーツの前に留まる。
小さな腕で空中に浮かぶディスプレイに対し、文字を打ち込みながら、キング・ルーツは静かに語る。

『まぁ……、お前がヘルプをこちらに引渡し、ここから立ち去るなら……見逃してあげてもいいぷがね』

「ハッ――、シャレのつもりか？」

『そうぷか……なら、手加減はしないぷよ。　お前が蜂の巣になろうが、僕は手を止めないぷよ』

瞬間、ディスプレイが消滅する。
キング・ルーツは笑みを一度浮かべると、小さな腕を翳して見せた。
ふらふらと立ち上がったカオスはそれを凝視するが、直後――

『弾けろぷ』

――、カオスを衝撃が襲った。
外見上では、何ら変化が無い。
だが、カオスは絶叫を上げなら床を転げまわっているのだ。

「ぐ、がぁぁっぁぁぁ！？」
『……どうやら、正解だったみたいぷ。　お前の周波数に対し、有害な電磁波を流し込んだぷ』

この短時間で、大した計算能力を持たないデンパくんがそれを成し遂げた？――。
カオスの中に疑問が浮かぶが、それらは激痛によって吹き飛ばされる。
キング・ルーツはそれを眺めながら、少し移動しただけだ。

『……ま、これもお前が選んだ道ぷ。　僕を恨んでもらっても構わない。　だけど、――僕にも一応の信念があるぷ。　人間の命令をこなさないといけないし、何よりここにいる仲間を守らなきゃいけないぷ。　だから、お前をデリートするぷ』

言うなり、再び己の電波情報を引き出す。
それは青い炎となり、キング・ルーツの掌で燃えた。
それを脇目で見ながら、キング・ルーツは構える。
『信念』とやらを、果たすために

『デリートだ』

ドスの利いた声が炸裂した。
それと同時に、キング・ルーツの掌にあった炎が消え去る。
そして、カオスの足元から炎が吹き上がる。

抵抗する間もなく、カオスを巻き込んで炎が燃えた。

『さようなら、勇敢な侵入者……だぷ』

11：　デンパスクエア　3

炎の音に掻き消されて、悲鳴すら聞こえない。
青白い炎が、カオスを焼いていく――。

かつて引き起こされた『魔女狩り』。
それを彷彿とさせるような、ぞっとする光景だ。

『……侵入者排除、ぷ～』

お気楽にそう言うと、己の電波情報を一筋抜き取り、水の球体を作り出す。
これだけの炎に焼かれれば、カオスの電波情報は一つも残らずデリートされている。

そう踏んだキング・ルーツは、炎を消そうとしているのだ。

しかし、――

バシュウンッ！　という奇妙な音と共に、炎が四方八方へ散り、そして消えた。
そこに立っていたのは、傷だらけのカオス――血をそこら中から流し、粒子が飛び散っている。

キング・ルーツは顔を歪めるが、戦闘というのはわざわざ相手を待ってくれない。

「ウェーブギロチンッ！！」

ズシャアッ！　という気味の悪い音と共に、薄い刃が飛んだ。
薄い、とはいっても電波を切る程の凶悪的な切れ味を持つ、殺人刃だ。

『ぷっ！？』

粒子が、飛んだ。
キング・ルーツが悲鳴を上げるよりも、事は早かった。
その巨体が、電波情報を詰め込んだ体が、ゆっくりと倒れていく。
腹部には、横一直線の傷口が出来ており――そこから有り得ない程の粒子が飛んでいる。

「おい……デンパの長」
『なに、ぷ……？』

「てめぇは仲間を死なせても何も思わないのか？」

自分が言える言葉じゃないのは分かっている。
『グレイブ』の幹部として、五人もの人間を殺した自分が言える事じゃないのは分かっている。
だけど、――。

「お前を今まで支えてきた奴らが、こうして『実験』なんかで殺されてもいいと思っているのか！？」

――自分は軽蔑される存在だから。
そういった『軽蔑』される自分とは、違って存在でいてほしい。

いや、『一般』の者達が、自分と同じようにはなってはいけない。取り戻しのつかなくなった自分のように、『軽蔑』されてはいけないのだ。

だから、こうして無理やり戻す。
自分と同じ世界に踏み込んでしまった者を、何としてでも『一般』へと押し返す。

「――お前がもしも仲間を大切だと思うなら、お前の背後にいる奴に牙を剥け！　お前の仲間を傷つける、そいつへと、立ち向かえ！！」

『……相手は人間のパートナー、ウィザードだぷ。　その背後にいるのは人間。　だから――』
「あぁ！？　お前らが人間の命令に従わなきゃいけない理由なんてどこにある！？　そりゃあ、普段は人間の命令を聞いているさ。お前達はそれで満足しているだろう？」

『そ、そりゃあ……それが生き甲斐、だから……満足しない訳が無いぷ』

「そうだろ！？　お前達は『人間の為に』、じゃなくて楽しいからやってるんだろ！？　誰も人間に従えなんて言ってねぇんだよ！！」

『ぐ、はッ――』

キング・ルーツの電波情報が、欠けている。
慌てて周囲にいたデンパくん達が駆けつけ、『ＨＰ＋』系統のアビリティ専門のデンパくんが治療を行っていく。

「これがお前の仲間だ。　こうして、治療してくれてるだろ。　だったら、何でそれを見殺しに出来る」

『――そりゃ、あ……ぼ、くだって……仲間を殺されたく、ない、ぷ。　だけ、ど……人間に逆らう訳には、いかない、ぷ。　こうして僕達のことを面倒見てくれる――』

「面倒を見てくれる？　それは善意から来る物じゃない。　自分の利益になる為だろうが。　昔はどうだったか知らないがな。　だが、今の『ＷＡＸＡニホン支部』は少なくともそうだ。　実験を受けてくれるから、それだけでてめぇらの面倒を見てる」

『なっ――』

「信頼関係、なんてモノはどこにもねぇんだよ」

沈黙が訪れる。
不意に、奥にいる研究ウィザードが笑い声を上げた。

『ハハッ……ヒャハハハハ！！　この短時間で、大した推測をしているじゃないか。　だが、少しばかり間違いがあるぞ。　６０年前の『ＷＡＸＡニホン支部』の時から既に、ここは利用される為にあ

った』

間違い無く、空気が凍った。
カオスの殺気だけが、研究ウィザードに突き刺さる。

『……ま、一つだけ言っておく。　この実験は中止だ』
「あ？」

『襲撃されたんだよ。　どうやら、ＷＡＸＡニホン支部もこれを黙認しているらしい。　恐らく、政府の差し金だろうな。　今回の実験を行っていた部門が、何者かの襲撃によって壊滅した』

「……」

『その襲撃者は、ここに来るだろうなぁ？　俺をデリートする為によ。　今頃、部門の科学者達は残らず殺されてる。　この実験の証拠を消すために。　だから、俺も対象内だ。　どうせ殺されるなら、今ここで全てを吐いてやる』

12：　デンパスクエア　4

ニヤリ、と笑みを浮かべる研究ウィザード。
だが、事は早かった。
残酷なまでに、唐突に。
『ぐっ――あぁぁぁぁっ！？』
突然奇声を発したかと思えば、研究ウィザードの体は粒子となって流れていた。
まだ多少は原型を留めているものの、デリートまっしぐらである。
『ぐっ……ちく、しょう……！　だけどよ――このまま死ぬのは何だから、忠告しておくぜ……ＷＡＸＡニホン支部は何らかの行動を起こすつもりだ。　それも、世界を揺るがすほどのな。　俺は『究極装備実験』が何、を意味する、か――若干、気付いている、んだよ…』
これが最後の言葉となった。
研究ウィザードの体は消え去り、電脳の地面に金属製の何かが落ちる。
弾丸だった。
「……」
恐らく、研究ウィザードに打ち込まれたこの弾丸は、打ち込んだウィザードの体が消えた為、こうして落ちてきたのだろう。

研究ウィザードの周波数を的確に計算し、そしてそれの毒となるような電磁波を弾丸の中に仕込んであるはずだ。

「……ヘルプ、お前はこれからどうするつもりだ？」
『……先程のウィザードの口ぶりからすると、実験は中止になったんですよね？』

そう言うと同時に、ヘルプはキング・ルーツを見つめる。
キング・ルーツは頷くと、小さな笑みを作ってみせた。

『僕は、仲間を連れて別の場所に行くつもりぷ。　その少年が言ったように、これからも利用されるのは癪だしぷ～……これからは、人間から受けた仕事を自由気ままにこなしていく日々を送るぷ～』

『……じゃあ、僕は自由に行動してもいいんですよね？』

『……そうかぷ～……お前も、行きたい場所があるんだぷね？』
『……ハイ』

１２：　デンパスクエア　４（後書き）

結局、実験の内容は明かされず……。
政府が『闇負陣（ダークネス）』に命令し、そしてわざわざＷＡＸＡニホン支部に手を回してまで、何故実験を崩壊させたのか……物語において、重要な点ですよ、ここ！

13：　ウィザード・イン

時刻は六時半。
再び住居――空き巣――へと戻ってきた訳だが、少しばかり様子が違う。
というのも、カオスとは別の住人がいるのだ。

「……、お前は居候すると」
『し、失礼です！　大体、カオスさんだって空き巣してるでしょ！？　これって居候より悪い事じゃないんですかね！？』

「何言ってる。　居候が悪い事とは言ってないぞ」

それだけ言うと、携帯水をゴクリと飲み、ソファに腰掛けた。
先程購入した弁当の包みを開けると、箸をリアルウェーブで構成した訳だが――。

視線を横に向ければ、ヘルプが物欲しそうにこちらを見ていた。
カオスはしばらく固まった後、舌打ちすると一言だけ告げた。

「半分だけやるよ」
『本当ですか！？』

「ああ、待ってろ――確か、この家に食器棚あったよな……」

キッチンへと向かい、ゴソゴソと探索を開始する。
途中で『台所の帝王』、『恐怖の君臨者』、『殺しても死なない』、と名高い『ヤツ』と遭遇した訳だが――家主がいなくなってから大分経つ為、冷蔵庫の下や蛇口付近にいた――『ヤツ』を躊躇無く『

最新式汚れケシケシマン！！』と大層な名前の付いた洗剤で窒息させると、食器を取り出す。

そのままヘルプの下へと戻ると、弁当の中身を半分ほど皿の中に入れてやる。

実はこの皿、２５０年後というだけあって、ガラス製なのに絶対に割れない仕掛けが施されている。

大した仕組みは分からないのだが、凄い事だけは分かる。

ちなみに、心なしかヘルプの皿に入っている弁当の中身よりも、カオスの弁同容器の中に入っている中身の方が多い気がする。

ヘルプはジュルッ……と気味の悪い舌なめずりをすると、カオスがたった今作った箸を手に取る。

カオスはそれを無視し、弁当に箸を入れる――が、

『うわぁぁっぁぁっぁんん！！』

「んだぁ……、今度は何だ！？　くだらない理由で絶叫したんならデリートするぞ！　ただでさえ周りの住人に空き巣がバレないかビクビクしてるってのに――あっ」

見れば、ヘルプが半無き状態で箸を見下ろしている。

そう、リアルウェーブである箸を手に取る事は出来たのだが、食べ物自体はリアルウェーブでは無いので触れる事が出来ない。

――ちなみに、リアルウェーブで食品を作る事は出来ない。　健康に害するらしいからだ。　とはいっても、電波を利用して食品を作る技術はあるのだが、リアルウェーブとは色々と違う点がある――。

チッ、とカオスは舌打ちすると、ハンターの先端をヘルプに向けた。

「ウィザード・イン」

珍しい単語と共に、ヘルプの体がカオスのハンターに入っていく。
『ウィザード・イン』とは、ハンターから信号を送り、対象の電波体をウィザードにするものだ。
無論、対象者はハンターを所持するオペレーターのウィザードとなる。

続いてカオスはウィザード・オンすると、面倒そうに説明を加える。

「デンパくんをウィザードにすると、確か上手くウィザード機能が働かないんだよな……？　説明書に書いてある通りだとすると……
『ウィザード・イン機能はデンパくんを対象とはしていない為、デンパくんをウィザード・インした場合は、デンパくんが完全なウィザードになりません』……つまり、お前の周波数を完全にウィザード化出来ていないから、お前は半ウィザードな訳だ」

『はい？』とヘルプが首を傾げると、カオスは追加説明する。

「……お前は完全にウィザード化していないから、お前の意思で実体化・通常化が出来るんだよ」
『……何か凄いですけど、とにかく弁当食べれるんですよね！？わはー！！』

はぁ、……と溜息を付き、カオスは弁当に目を向ける。
ヘルプは弁当にがっついており、カオスの方には目を向けていない。

14：朝

「……ぅ……あ、……もう朝か……」

静かに起き上がると、隣を見る。
そこには何も無い――『グレイブ』特製の灰色のバイザーを掛けると、そこにヘルプがいた。
寝転がっていて、静かな寝息を立てている。

「（……通常化したのか？……いや、あいつは実体化した状態の方を好みそうなもんなんだが……そうか、不完全な状態だから実体化・通常化のスイッチが勝手に切り替わる事もあるのか……寝ている時は特に、コントロールする意識が無いからな）」

などと適当に考えながら、カオスはポケットに仕舞っている手帳を千切る。
今の時代、紙やノートなどといったモノは滅多に使用されない。
その為、入手困難でもあるのだが……『グレイブ』では任務中の仲間との会話の際に、相手に会話を知られないように『記号』を紙に書いて会話している。

その為、『グレイブ』から手帳を三冊ほど貰っている。

適当に『弁当買ってくるから待っていろ』、などと書き込み、テーブルの上に置く。
そのままベランダに乗り出すと、一気に落下した。

途中でウィルス融合を引き起こし、ジャミンガーとなる。

１４：　朝（後書き）

今回の話は今までの話が一段落着き、次の話へ向かうための『間』
みたいなもんです。
だから短いです

15：『メイン』1（前書き）

『メイン』編開始――。

15：『メイン』　1

「……（何だ、アイツら……）」

朝食を買いにコンビニへ向かおうとしたカオスだが、彼の視線は一箇所に釘付けとなる。
路地裏に、五人程度の溜まりが出来ているのだ。

それだけなら不良の集まり、で終わるだろうが、それを否定するような材料があるのだ。

「……（変な電波を放ってやがるな、アイツら。　それも見た事が無いようなモノだ）」

カオスはハンターを覗く。
そこにあるのは、捕獲したメットリオだ。
メットリオは引っ切り無しに異常を訴えており、全身を震わせている。

このメットリオに空気中の電波を食べさせた所、こういった状況になった。
カオスが「変な電波を放っている」、と確信したのもメットリオが異常を訴えているからだ。
つまり、メットリオが「変な電波」を食べてしまい、異常事態を察した……という事だ。

そしてあの溜まり場――「変な電波」の発信源があるとすれば、あの集まりが一番怪しい。

「……（追う、か）」

裏路地の奥へと向かう集団を見て、カオスは拳を握る。
別に放っておいても構わないのだが、ウィルスが「変な電波」を食べた事で融合に支障が出ても困る。

支障が無い、と判断するには、「変な電波」について詳しく知る必要がある。
なら、やる事は決まっている。

――――――

犯罪組織、『メイン』。
規模は過去に暗躍したゴスペルと同程度だが、これといった特徴も無い犯罪組織だ。
だが、彼らが引き起こす被害は尋常な物では無く、高速道路が丸ごと一つ切断された事もある。
『メイン』の基本メンバーは脱獄者。

一度犯罪を犯してしまえば、社会的に下劣に見られるのは当たり前で、まともな職にもあり付けない。
そういった人々が『メイン』に集まるのだが、中には孤児もいる。
孤児の大半は孤児院に入る事が出来ず――大体が人数関係である――仕方なく『メイン』に入り、生計を立てている者だ。

『メイン』の一人――高瀬（たかせ）　アープは高校生だ。

彼は走りながら、手の中に一つの機械を握っている。
その機械の名前は『奇怪電波』。
近々、『メイン』はこれを利用した大規模犯罪を行う為、アープに『奇怪電波』の調整確認が任された。
『奇怪電波』を使って調整確認を終えた訳だが――。
「――（追っ手がいるな）」
アープはチッ、と唾を吐く。
背後から足音が聞こえ、何度道を曲がろうと足音は的確にコチラを追いかけてくる。
アープの他に、今回の調整確認を任されたのは四人。
全員が逃げ切れるかどうか――、難しいところだ。

16：『メイン』　2（前書き）

16：『メイン』　2

追っ手が何人かは分からないが、足音からして一人のようだ。
高瀬（たかせ）アープはそう結論付けると、懐（ふところ）へ手を伸ばす。

そこにあるのは『電波式強化（ウェーブトゥパワー）デバイス』。
『メイン』のメンバーのほとんどは、電波変換出来ない者だ。
その為、ジャミンガーかノーマルとなる者が多い。

しかし、社会的に差別されている身なので――孤児や無職者はお金が無いので――、ウェーブカードを手に入れるのは困難を極める。

その為、実力は並みの電波人間にも劣る――それを覆す為に存在するのが、この『電波式強化（ウェーブトゥパワー）デバイス』だ。

擬似的な電波核を体内に作り出し、体の限界を突破する事で並みの電波人間を超える実力を身につける。

しかし、『限界を突破する』という言葉通り、体にかなりの負担を掛けているのだ。
更に恐ろしいのが、限界を突破している故に体の不調に気付かず、戦い続けている内に体が壊れてしまう事だ。

かなりのリスクを伴う訳だが、それでも『メイン』にはやる事がある――大いなる目的が。

『電波式強化（ウェーブトゥパワー）デバイス』の使い方は簡単で、ハンターの側面にチップを差し込むだけだ。

懐から取り出した袋を歯で食いちぎると、中から飛び出したチップをハンターに差し込む。
この力があれば勝てる、とアープは確信していた。

ノーマルウィザードの残骸から回収したデータを読み込ませ、ノーマルへと姿を変える。
追っ手の足取りが近づいてくる中、アープはインパクトキャノンで近くにあった柱を倒壊させる。

いわゆる、通せんぼというやつだ。

ちなみに、ノーマルというのはノーマルウィザードと融合した者の事だ。
通常のノーマルウィザードと融合するにしても電波核が必要だが、デリートされた状態のノーマルウィザードのデータを使い、『電波（ウェーブ）式強化（トゥパワー）デバイス』を介入させると電波人間に近い状態になれる。

つまり、残骸を使った強制融合だ。

実力はジャミンガーに並ぶか、それ以下といった所だ。

――――――

「チィッ！」

カオスは大きく舌打ちする。
目の前にあるのは、倒壊した柱――の成れの果てである、大量の瓦礫だ。
埃とチョーク粉が混ざったような煙に、咳き込みそうになる。
それすらも押さえ込んで、カオスは瓦礫を見つめる。
正直言って視界は悪いのだが、『変な電波』について早く吐かさねばならない。
この瓦礫は逃亡者が追っ手（コチラ）に気付き、柱を倒壊させる事によって発生させたモノである……と、そこまで解析してカオスは張り裂けるような笑みを浮かべる。
逃亡者は上手くやったつもりだろうが、この行為は逆に仇となっている。
追跡されないようにわざわざしたのは、追いつかれると困るからだ
ここまで来ると、『怪しい』から『確信』に変わってしまう。
それと同時に、カオスの残虐的な性格に火が灯る。
「……さぁて……、子猫ちゃんの逃亡タイムはいつまで続くかなぁ……？」

一度闇に染まれば、光に戻るのは難しい。
それを丸っきり示してしまうのが、今のカオスだ。
犯罪者が出所しても再犯するのと同じで、カオスも簡単には闇を拭えない。
『残虐』という名の、絶望的な闇を。

17：『メイン』　3

アープ達五人はそれぞれが『電波式強化デバイス』を利用した擬似融合を果たしている。

五人の内四人がノーマル、一人がジャミンガーである。
体の質がウィルスに耐えられるモノで無い限り、ジャミンガーになるのは極めて難しい。
アープがノーマルウィザードの残骸データを使用してノーマルになっているのも、それが理由だ。

単純な戦闘力ではジャミンガーの方が強いのだろうが。

瓦礫を作って道を塞いだ事で、五人は幾らか安堵していた。
相手が一般人であると思い込み、そして追っ手のウィザードがウェーブロードを通ってこちらへ来ようとも、自分たちは『電波式強化デバイス』のおかげで、電波人間以上の力を持っているから大丈夫だ……、と。

だが、極めて可能性が低いにしても……こういった事を考えなかったのは間違いである。

「相手は一般人ではなく、尚且つ犯罪組織で訓練を積んだ電波人間である……」、と。

「ごっ、はがぁぁぁっぁあああ！？」

突如、アープの左隣に居た仲間が吹き飛ばされる。

廃墟となってしまった家屋に突っ込んだ仲間は、起き上がる気配が無い。

周りは呆然とするのみだが、アープは即座に駆け出す。

『メイン』の基地はウェーブロード上から来るウィザードと電波人間の侵入を遮断しており、壁には毒となる電波が微弱に流れている為、通り抜ける事も出来ない。

基地に入るには、『メイン』のメンバーだけが持っている『証明書』が必要なのだ。

だからこそ、アープはこう判断する。

「基地に行けば、安全」だと。

駆け出す直前で仲間の手を引っ張っていた為、二人の仲間が共に駆け出す。

引っ張り切れなかった仲間達は即座に事態に気付き、慌てて駆け出した。

煙の中から現れる追跡者は、ただ。

笑って、嘲って、絶望を振りまく。

一度狙われたら絶対に逃れる事が出来ない、地獄の猟犬が始動する。

どれぐらい走っただろうか？
体の限界を超えてしまっている彼らには、疲れといったモノが存在しない。
そして、脚力も並みではないのだ。

ジャミンガーとなっている仲間は辺りを見渡すと、慌てた様子で叫ぶ。

「どうすんだよ！？　アイツを救出するには、あそこに戻るしかないんだぞ！？」

「……相手の実力が分からないな。　いいか、俺だってアイツを助けてやりたい――だけどよ、助けに行って俺たちがやられたら誰がアイツを救出する？　基地の仲間達に頼って、大人数で救助に当たった方がいいに決まってるだろうが！」

ジャミンガーに対し、アープは叫び返した。
実力ではノーマルはジャミンガーに及ばない。
だが、それでも――吹き飛ばされた、仲間を救出する為に……実力では敵わない相手へ、言葉を投げる。

ジャミンガーは反論しかけたが、肩を落とす。
ちなみに、このジャミンガーの姿は少しばかり特徴的だ。

肩には棘パーツが模されており、足にも棘が模されている。
体付きは若干ゴツく、顔は黒いバイザーと黒いヘルメット。

――――――

そして、顔の下部分には剥き出しになった人間の口がある。
かつてのロックマンやジャック・コーヴァスと、似たような構造をした顔部分だ。

「……そうだな。　冷静に行動しねぇと……基地まで後どれぐらいだ？」
「――人間の走りで三十分。　俺たちの走りで五分だ」
仲間達の会話を聞いた後、アープはよし、と呟く。
駆け出す準備を整えた、その時だった。

不意にボッゴガアアアアッ！！　という破裂音と共に、背後の路地がまとめて粉砕される。
裏路地から行く事の出来るこの町は、建物が古い故に人が住まないゴーストタウン――その為、人的被害は無いのだが、アープは戦慄を覚える。

ろくに駆け出す準備を整えないまま、一気に駆け出す。

そして、悲劇は起こった。

アープの隣を走っていたジャミンガーが突如悲鳴を上げ、体をゴキリッ　と変な方向に曲げる。
それは本人の意思では無いらしく、体の動きからしても不気味さを感じられる。
「おい！！　おいッ！？」

頭の中では分かっていた。
何が起きたか、どうしてこんな事になったのか。
『電波式強化デバイス』の副作用だ。
ろくに駆け出す準備も整えず、無理な運動をした為に体が壊れているのだ。

それに――今現在、体が崩壊していく仲間は、普段から『電波式強化デバイス』を使用していた。

その為、連続使用に体が耐えられなかったのだろう。

アープ以外の仲間も事態に気付き、こちらを振り返る。
もう一人のノーマルの方は慌てて戻ってくるが、三人目のノーマルは止まらない。
そのまま近くにあったセキュリティードアを『証明書』で開け、閉じる事無く中に駆け込んでく。

恐怖に駆られた行動なのだろうが、アープともう一人のノーマルは失望せずにはいられなかった。
『裏切られた』、という単語が脳裏を掠る。

「逃げ、ろ……俺たちの『目的』の、為には――」

「バッカ野郎！！　俺たちは同じ『目的』を持つ者同士だろうが！
社会に認められたい、その気持ちを背負って戦う同士なんだ！！
置いていけるかよ！！」

綺麗事だというのは分かっている。

だが、アープにとっての『仲間』は大事なモノなのだ。
身寄りの無い孤児として、孤児院から拒絶され、社会から拒絶され、冷たい人生を送ってきたアープの居場所は、ここしかない。
先程吹き飛ばされた仲間とは違って、このジャミンガーは目の前にいる。
これなら助けられる。
幾ら相手が強くても、ジャミンガー一人抱えた所で追いつかれるハズが無い。
「必ず助かる！！　だから、安心――」
もう一人のノーマルが呟くが、直後吹き飛ぶ。
追跡者はアープを睨み付けると、不快感丸出しの表情を作って見せた。
「お前らが犯罪行為してたのは分かってんだよ。　得体の知れない自作電波をハンター経由でばら撒くのは、今の時代じゃ犯罪だぞ」
追跡者は淡々と告げて、ただ不快感を表す。
アープは追跡者の顔を見た途端、「あっ」……という声を漏らした。
コイツの顔は知っている。
何者かによって襲撃された『ＷＡＸＡニホン支部』。
その隙を突いて、『メイン』は『実験』とやらの情報を盗み出していた。
そして――、要注意人物として、コイツが登録されている。
名前は混天カオス。

『メイン』が今日実行する、『誘拐』に支障を与える可能性のある人物だ。

そう、『究極装備（アルティメットリティ）』を宿したヘルプの誘拐を、妨げる可能性のある人物。

18：『メイン』　4

「ハッ……ハハッ……ハッハッハッハハ！！」
「……どうした？　イカレちまったか？」
カオスの問いにも答えず、アープは笑う。
それこそ、狂ったように声を上げて。
倒れているジャミンガーを一度見ると、そのまま立ち上がる。
キャノンを装備すると、カオスに向けた。
「気付かなかったのか？　んぅー？……『究極装備（アルティメットウェポン）』の危機に」
カオスの顔が引きつる。
彼の左手に構えられたダークソードは、「とっとと話せ」とでも告げているようだ。
アープはそれを見た後、薄ら笑いを浮かべて話を続ける。
「――俺ら『メイン』はよ、反社会集団だ。　社会から見放され、冷たく見下される人々の悲しい集団だ。　社会のメインに立つ人々に認めてもらい、同じメインに立つ事が俺たちの目的だ」
「だからどうした？」
「反社会集団、ってのがどういう意味か分かってんのか？……社会の表舞台に立つ、『ＷＡＸＡニホン支部』も当然、敵対対象だ。
昨日起きた『ＷＡＸＡニホン支部襲撃事件』。　あれのおかげで、『ＷＡＸＡニホン支部』のコンピュータに隙が出来た。　襲撃されたコンピュータのみだが……俺たち『メイン』はその危機を逃すま

いと、ハッキングしたんだよ。　結果、どうなったか分かるか？」

「……？」

「……『究極装備実験』なるものを発見した。　そして、お前がその実験を崩壊させた事も知っている。　俺たちが社会のメインに立つ経過上、とんでも無く壮大な計画を始動させる必要があった。それに必要なのが、究極装備だ」

カオスは大まかな内容を理解したところで、ダークソードに力を込めた。

反社会集団、『メイン』はヘルプの居場所も知っているハズだ。

そして、奴らは究極装備が必要だといった。

確か、究極装備はヘルプの『核』に宿るモノだったハズだ。

そして、その『核』を取り出すには――。

そこまで考え、小さく首を振る。

考えるまでも無かったからだ。

「……チィッ！！　クソがっ！！」

バシュッ、とカオスの体が消え去る。

それを見たアープはへなへなと座り込んでしまい、疲れ果てたような様子を見せる。

「あっぶねー……」

「……よくあんな場面で演技できたな、物凄い笑い方だったぞ」

「……まぁな。　でも、俺の言っている事は全部本当だった。　ヘルプ捕獲部隊の方は大人数だから、混天カオスをデリートしてくれるだろ……俺達はコイツを運ばないと。　その後で、家屋にぶち込まれたアイツも助ける」

「おうよ」

アープはジャミンガーを背負うと、基地に向かってゆっくりと歩き出した。

19：『メイン』　5

カオスが戻ってこない。
その事に違和感を覚えたのは、三十分程前だ。

起床したのが一時間前。
机の上にはメモが置いてあったが、たかが朝食購入だけでこんなに時間が掛かるハズは無いのだ。

そんな悪い予感は、不幸にも的中してしまう。

『うっ……』

ヘルプは小さく呻いた。
目の前にいるのは、三十人程のジャミンガーとノーマル。
誰もが電波人間並みの実力を誇っており、そこらの一般的な者では無いというが分かる。

更に、その集団はご丁寧にもヘルプを弾丸で攻撃し、的確に気絶させようとしたのだから、友好的でないのも分かる。

『……ッ』

辺りを見渡し、逃げ場が無いのを確認する。
ベランダにはウェーブロードを伝って来たのか、ジャミンガーとノーマルが数人ほど居る。
玄関方面はそれ以外の者全員だ。
危機的状況にヘルプは喉を鳴らす。

どんなモノでもいい。
贅沢は言わない。
極悪非道な人物でもいい。
いや、人間やウィザードで無くてもいい。

せっかく助けてもらったこの命を、僅か一日で散らしたくは無い。

誰でもいい、何でもいい、あの人が守ってくれた命を、こんな所で棒に振りたくは無い。

目を瞑り、無理承知な願いを浮かべる。
そして、自分自身を嘲った。
デンパスクエアでカオスが自分を助けてくれた時のように、二度も助けが来る事なんて無い。

結局、カオスのやった事は無駄になってしまった。
彼が命を賭けて行った行為は、無駄になってしまった。

どれもこれも、自分が悪いのだ。

覚悟を決め、目を開けたその時だった。

辺りを灰色の閃光が満たし、近くに居たジャミンガーとノーマルが五名倒れる。
息はしているだろうが、あの様子では二時間程度眠り続ける。

ジャミンガーとノーマルには『ワープ装置』でも付いていたのか、
気絶すると同時にフッと体が消えてしまった。

ヘルプは驚いて辺りを見渡す。
敵側も呆然としているらしく、誰も動こうとしない。

そして、彼は現れた。
ヘルプが望んだように。

人間でもウィザードでも無いジャミンガーで、彼に贅沢など言えず、
そして――極悪非道な彼が、ヘルプの前に現れた。

一度だけでなく、二度までも。

運命のおかげか、偶然なのか。
それは分からない。

ただ、彼は再び参上した。
小さな小さな、たった一つの命を守るために。

「助けに来たぞ、クソチビ」

ただそれだけ告げて、余計な事は一切語らず。
敵に向かって、単身で立ち向かっていく。

20：『メイン』 6

「……名は混天カオス、だったな。　相手はたかが一人！！　数で押せば勝てる！！」

誰だかの叫びにより、カオスの出現によって圧倒されていた集団が動く。

狭い部屋の中で、最も効率の良い戦い方をする。

効率の良い戦い方、というのも簡単だ。

大人数が一斉に動けばそれこそ自滅だ。

なら、話は簡単である。

狭い故に相手も逃げる場所が無いのだから、遠距離攻撃をしてしまえばいい。

ドシュッ！　という複数の弾音が重なり、バスターが飛ぶ。

中には弓や刃物も混ざっているのだが、それらは少なめだ。

カオスはそれを見ながら、即座に情報をまとめる。

ノーマルやジャミンガーと比べ、電波人間のデータ処理能力は格段に上だ。

相手のデータ防衛性能――電波人間なら、相手にデータを取られないよう、常に微弱な妨害電波が放出されている。　電波人間同士の戦いだと、その妨害電波を突破しないとデータを得られないのだ。

　この妨害電波を、ＷＡＸＡは防衛性能と呼んでいる――は薄い為、瞬間的な早さでデータを取得する。

対する相手はコチラの防衛性能を突破出来ないため、データが得られない。

カオスのバイザーに表示されるのは、的確な戦闘指示だ。
どう動けば効率よく攻撃を避ける事が出来るのか、どこを攻撃すれば最も威力の高い攻撃が弾き出せるか、等の情報がズラリと並んでいる。

カオスはその情報をバイザーの左下に表示した後、迫り来る遠距離攻撃を左右に動いて回避する。
次々とバイザーの左下に指示が並び、カオスはその通りに動く。

ヘルプは既に机の下に隠れており、なるべく被害を受けないようにしている。

カオスは右の壁を蹴り上げ、宙に浮く。
弾丸が壁に衝突するが、カオスは既にいない。

集団の真ん中へと、カオスは落下していく。

唖然とする周囲だったが、カオスは即座に左腕をダークソードへと変形させる。
右隣に居たノーマルの背後を切り付けると、更に左隣のノーマルとジャミンガーの胸を切りつける。

三人は同時に倒れ、それっ切り動かなくなってしまった。
三人分の粒子が溢れ、上へ上へと昇っていく。

それと同時に周囲がソードを構え、体勢を整えるが、何せ大集団だ。
仲間同士で足を引っ張り合って動けなくなり、パニック状態へと陥

る。
それを見たカオスは、近くに倒れているノーマルのハンターを操作して『証明書』を自分のハンター内へインストールする。
パニックを見かねたベランダ側の集団が部屋へ入ろうとするが、カオスの方が早かった。
もはや行動不能となってしまった集団を潜り、ベランダへと一気に接近する。
集団が部屋に入ると同時に、『ドリームボム』が炸裂した。
バッガァァッァァンン！！　という轟音と共に、集団のパニックが収まり、ベランダ側の集団は爆発の衝撃により、マンションから落下していく。
集団が遠距離攻撃を開始するよりも早く、カオスは机の下のヘルプを抱え、ベランダからウェーブロードに飛び乗った。

『こ、これからどうするんですか！？』

「奴らの本拠地に行く。　何でお前が狙われたのか、知っておく必要があるからな――チッ、ヤツらの起こした騒ぎのせいで、あの部屋へはもう戻れない……帰ったら新たな住居を見つけないといけないな」

21：『メイン』　7

カオスの視線の先にあるのは、二階建てでセキュリティードアが取り付けられた建物だ。
このゴーストタウンの中では不自然に感じてしまう程、最新技術が取り込まれ、『証明書』が無いと扉が開かない仕組みになっている。
間違いなく、『メイン』の本拠地だ。
それに、カオスは『メイン』の隊員が『証明書』を使ってあの建物の中に逃げ込んだのを見ている。

「……お前はここで待ってろ。　あの建物と、ここの位置は近い。
ハンターへのヘルプシグナルも通じるだろ。　お前は不完全ながら、ウィザードという扱いだからな。　ヘルプシグナルを発する事も出来るハズだ」

尚も不安そうにするヘルプだが、カオスは取り合わない。
さっさと証明書をセキュリティードアに翳すと、中に入ってしまった。

灰色のゴーストタウンに残されたヘルプは、ただ震えるだけだった。

――――

「なっ――嘘だろッ！？」

アープが叫び、表情が崩れる。

彼の隣には平凡的な体型をしたノーマルがおり、彼らの右隣には培養液に満たされたベッドがある。
その中に先程暴走したジャミンガーが横たわっており、部屋の隅には真っ先に逃亡したノーマルが蹲っている。

彼ら以外の人員は全てヘルプの捕獲に回されてしまっていたのか、他には誰も居ない。

カオスはそれを見るとつまらなそうに告げた。

「情報提供、感謝するぞ」

その時、アープ達は知った。
目の前に居るコイツに、誰も敵わないのだと。
もはや自分達とは次元が違うのだと。

そして、仲間達はコイツただ一人にやられてしまった。

悟ってしまったアープ達は動けず、カオスが奥へと進んでいくのを止められなかった。

「……、ぐっ」

ただ、呻いて。
ただ、絶句して。

動けなかった。

カオスは『証明書』で二階の扉を開ける。
そこにあるのは、ズラリと並んだ机と椅子、そしてパソコンだった。
それらの奥に、王が君臨するように一際大きなパソコンが置かれている。

青色に満たされた部屋を横切り、カオスは一際大きなパソコンを起動させる。

それと同時に『メイン』の『データサーバー』が表示され、彼らの秘密情報の全てが並んでいく。

「……」

そこに並んだ単語は数個。
『ＷＡＸＡニホン支部』をハッキングして得た情報は、別の場所に保存してあるのだろう。
そこにあるのは、『メイン』の中でも重要な単語だけだ。

「……『究極装備』、『ヘルプ』、『反社会活動』、『ネットワーク・メイン計画』……『並列情報』……」

そして、

そこにあるのは、

厳重にプロテクトされた、
最高の機密情報。
「『神は癒される』、『高次元存在の出現誘導』……？」
最深部にあった二つの言葉。
それらが意味するのは重大な事なのだろうが、カオスには理解できない。

『……、おやおや。　いけませんねぇ……不法侵入ですか』
「――ッ！？」

不意打ち気味に聞こえた声に、体が固まる。
今まで『グレイブ』や『キング・ルーツ』、『メイン』を敵に回してきたが――そんなモノでは無い。
声だけで伝わる、尋常じゃない気配に指先が震える。
首すら動かせない極度の緊張の中、辛うじて口を動かせた。
「誰だ？……」
『それは私の台詞なんですが……名乗っておくとします。　ラファ

エルですよ、ラファエル。　おや？……その様子からすると、『宇宙神話』を知らないようですね。　なら、ラファエルの名前を知らなくても当然ですか……つい先程見たでしょう？　『神は癒される』、……これが指すモノは、この私です』

『メイン』の中でも最重要機密情報に指定された、一つの存在。
それが、自分の背後にいる。
それを知って益々緊張を高めるカオスだが、そこで気付いた。

「……、テメェが……ヘルプの誘拐を指示したのか……？」

『それは違いますよ。　ただ、私には究極装備の存在が必要なのであって、『メイン』がその為に動いた……ってだけですよ。　まぁ、指示しては無いですが元凶は私ですね』

楽しげに、ラファエルはそう告げた。
カオスは昂ぶる感情を抑え、小さく呟く。

「……元凶は、テメェなのか……だったら、デリートさせてもらおうか」

瞬間、カオスの体が動く。
自分から六メートル程後方にいた、ラファエルへと。

『……不法侵入しておいて、その態度ですか……人類というのは、やはり低次元ですね』

ラファエルがそう呟き、指先を動かした直後だった。
ゴッバァン！　という轟音と共に、カオスの腹部が凹む。

しばし硬直した直後、後ろへ頭から落ちる。

『……楽園の裁きを』

その一言と共に、カオスの体が跳ねる。
奥に君臨するパソコンのモニターへ、背中から衝突した。
カオスの体を感電特有の感覚が包んでいくが、事はすぐに起きる。

『卑しい人類の分際で、上の存在に逆らってはいけませんよ？……楽園で裁きを』

ダッガァン！！　という音と同時に、勝敗は決した。
ラファエルは暫しの間笑みを浮かべる。

『おっと……私の存在も不安定なので、いつまでも留まれない……『メイン』が潰れたので、次は誰に私の出現を手伝ってもらいましょうかね……？』

22：『メイン』　8

「……ぐっ……」

カオスの目が覚めたのは、早朝だった。
ヘルプはカオスの寝覚めを確認するなり、歓喜の声を上げる。

『良かった！　ホントに良かったです！！』
「……ヘル、プ？……どういう事だ」

『中々出てこなかったので、中まで調べに行ったんですよ！』
「……そしたら、俺が気絶していたと……」

危険を犯してまで探してくれた、と。
カオスはその事実に動きを止めるが、すぐさま脳裏に「ヤツ」が浮かんだ。

「ラファエル、か……」

手も足も出なかった。
コチラが精一杯戦おうが、ラファエルは毛虫を踏み潰すかのような軽さでカオスを粉砕する。
その事実が、どうしようも無くカオスを蝕んでいた。

やがて彼は立ち上がると、こう言った。

「行くぞ。　住居を探さないとな。　ホームレスだけは死んでもゴメンだ」

22：『メイン』　8（後書き）

今現在の『ｃｏｒｄ　ｎｕｍｂｅｒ－０８』よりも時系列が前です。
本編でのアメロッパ騒動から数十時間経過した状態です。

23：　住居探し

時刻は昼過ぎ。
二日前――『メイン』との戦闘が終わった直後から数えると――から住居を捜し求めて旅しているカオスとヘルプなのだが、それらしい場所は見つからなかった。

昨晩はマンションの一室が空いているのを見つけたのだが、マンションの管理者に速攻見つかってしまい、慌てて逃げ出した――という凄まじい話もある。

食費はグレイブのおかげで腐るほどあるので、困ってはいないのだが――住居が無いという事は寒いという事なので、それに関してカオスはイライラしっぱなしだった。

『歩き続けて二日目……もう、イヤです……』

「コッチも同じだ……寒いったらありゃしない。　コートやら何やら、全部住居に置いてきたからな……秋に半袖一枚は地獄だぞ……ってか、オマエは電波化すりゃ済むだろ！！　その前にオマエは歩いてない！！　浮遊してるだけだろぉおおおおお！！」

怒涛の突っ込みが炸裂するが、ヘルプは聞いていない。
カオスはイライラオーラを充満させながらも、自動販売機にハンターを押し付ける。
自動的にゼニーが清算され、目当てのジュースのタッチパネルを押す。
板状の透明ディスプレイ――分かりやすく言うなら、マウスの下に敷くアレを透明にしたような物だ――が自販機から飛び出し、オレ

ンジジュース一個と健康ジュース（何気に美味しい）を差し出した。
背が低いヘルプの代わりにオレンジジュースを取ってやり、もう片方の手で健康ジュースを口へ運ぶ。
ヘルプにしても、浮遊すればオレンジジュースぐらい取れるのだが……それに気付いたカオスは、更なるイライラを募らせる。
「おぉっと！！　何をしている！！」
「……あ？……」
声が飛んだ左方向へと目を向ければ、そこに居たのは軽量版プロテクトスーツを着込んだサテラポリスの隊員だった。
それを見たカオスは一言
「逃げるぞ、クソチビィ！！！」
『へ？　あ、ハイ！！』
「あ、ちょ――待つんだ！　逃げ出すって、よっぽどやましい事があるんだな！　こうしちゃいられん、地の果てまで追いかけてやるぞ、ハッハッハー！！」
「来るなあああああああ！！」
『グレイブ』として過ごしてきたせいか、サテラポリスを見れば真っ先に逃げ出してしまうカオスであった。

数十キロも馬鹿みたいにショッピングモールを走り続けたカオスがサテラポリスにボディプレスを決められ、それを見たヘルプがうっかり実体化してしまい、ついでに拘束されたのは言うまでも無い。

24：アレム

「……で、お前達は小学生単独立ち入り禁止なショッピングシティで、何をやっていたんだ？」

ボディプレスから開放されたカオスへの第一声が、これだった。
オレンジ色のバイザーに隠された瞳が、ヤケに殺気を放っている。
内心ガクガクなカオスだが、それを表に出す事は決して無い。

「……家だ、家が無いんだ」

――――――

――

カオスは自分が元『グレイブ』だという事も、『グレイブ』に堕ちた経緯も全て明かした。
サテラポリスの隊員がもしも自分を逮捕しようとするなら、ジャミンガーとなって逃亡すれば良いだけの話だったからだ。
逃走体制を整えていたカオスだったのだが、返事は意外な物だった。

「うっ、うっ……ツ、ツラかっただろうな……お、俺が面倒見てやる……お、お前のようなヤツを更正させるのが俺のし、仕事でもあるしな」

何だか涙交じりに言われてしまい、断りきれなくなってしまったカ

オスであった。
ヘルプの方へ視線を向けるが、彼も彼で困惑している。
危なくなったら逃亡すればいいか、と数秒前にも弾き出した答えを考える。

――――――

――

サテラポリスの隊員、官戸（かんと）アレムに案内された先は、三階建ての一軒家だった。
中々豪華な部屋で、最近登場した『ＰＣゴールデン』なんかも置かれている。

カオスはその様子に呆れながら、尋ねた。

「サテラポリスって、稼いでるんだな」
「まぁな。　俺は『犯罪者更正導者』だから、給料は平均よりも高いぞ」

『犯罪者更正導者』――。
更正する見込みのある犯罪者を、牢屋ではなく自宅で預かる者の事だ。
かなり難易度の高い仕事な為、給料も高い。
カオスは溜息を付く。

つまり、アンムはカオスを「更正する可能性のある犯罪者」、と見ているのだ。
口には出さず、カオスは「どこがだ」、と吐き捨てる。
勝手な理由で闇に走り、勝手な理由で人を傷つけた――これだけ救いようの無い犯罪者は、滅多にいないだろう。

「じゃあ、適当にくつろいでくれよ。　二週間後に控えている『祭合旅行』に向けて、サテラポリスの各警備部隊も忙しいんだよな……警備部隊としての実績が過去にある俺も、駆り出される事になったからなぁ……少しデータをまとめないといけないから、あんまり邪魔するなよ」

奥へと入っていくアンムの後姿を見て、カオスは複雑な心境になった。
懐かしいような、そんな奇妙な感覚を覚えていた。

25：　質問者

アレムの家に居候してから四日が流れた。
どうやら、アレムはサテラポリスで忙しいらしく、カオス達とは滅多に顔を合わせていない。
テーブルの上に食事と置手紙がある、なんて光景は当たり前だった。

一応、カオスは四日分の食事代や電気代をアレムに渡してある。
タダで居候するのは、何だか気が引けるのだ。

ヘルプはアレムが買ってくれたゲームに夢中になっており、カオスへ興味を示そうとはしない。
それを見て、「ゲーム代も払うのか……」と半ば呆れてしまうカオスだった。

カオスは灰色のハンターを操作し、ディスプレイを出現させる。
見やすい大きさに調節した後、目的の『情報』へ画面を切り替えた。
そこに映っているのは、最近話題になっている『アレ』だ。

『祭合旅行開催まで、後十日！！』

ご丁寧に、大きなカウントダウンバーまで取り付けられたニュースサイトを閉じると、カオスはヘルプに視線を移す。

「……ちょっと特訓してくる。　家から出るなよ」
『了解でーす』

間の抜けた返事を聞き流しながらも、カオスは玄関から外へ出る。
『グレイブ』から抜けたとはいえ、特訓を怠る事はしない。

アレムは、ＴＫシティの一角に居た。
『祭合旅行』に向けての下準備を行わなければならないのだ。
ちなみに、アレムの担う『犯罪者更正導者』は、副業のような物だ。
サテラポリスの内の者が任意で行う仕事でもある。
他の隊員達は任務だけでも充分食べていける為、面倒臭がってそういった役職には就かない。
アレムのお人好しさが滲み出ている部分でもあるのだ。

『犯罪者更正導者』の仕事を持っているとはいえ、通常のサテラポリス関連の仕事も行わなければならない。
だからこそ、アレムはＴＫシティの準備に駆り出されたのだ。
通常、『犯罪者更正導者』の仕事中――現在は、カオスを更正させている――は隊長も気遣ってくれて、仕事が入ってこない。
だというのに、自分へ仕事が入ってくるという事は、やはり忙しいのだ。
と、そこで二～三人程度の子供達がアレムの下へとやって来た。
恐らく、『祭合旅行』に参加する学校の者達だろう。
『祭合旅行』のプランを立てる為に、運営係がこうしてサテラポリ

スの隊員に色々と聞きに来る事もある。
この子供達の近くにいるのは自分一人。
アレムは、子供達に尋ねられるよりも早く、自分から尋ねる事にした。

「何を説明してほしい？」
「……えっと……」

進み出たのは、一人の少女だった。
思えば、今は四時過ぎ――小学校なら、下校していてもおかしくはない時刻である。
この少女には、放課後になっても自ら聞きに来るような事情があるのだろう。

「……ここら辺――周辺五十メートルに、『アトラクション』の予定はあるんですか？」
「……あぁ……ちょっと待ってくれよ」

アレムはそう告げると、ハンターへ目を移す。
目当ての情報はあっという間に見つかった。
素早く表へ目を通すと、少女へ視線を移す。

「そうだなぁ、予定は無いよ。　一番近い『アトラクション』は、二百六十メートル先だね」
「そうですか。　ありがとうございます」

立ち去りかけた少女達を見て、アレムは思わず声を掛けた。

「君達、どこの学校？」

「『星流小学校』、第五学年です。　私の名前は小星ミラ。　コッチが――」

仲間の説明を始めた少女を見て、思わずアレムは頬を緩めた。
やはり自分は平和な光景が好きなのだと、実感させられる。

26：特訓

カオスが向かったのは、アレムと出会った場所でもある『ジェネラルショッピングシティ』だ。
何故ここに来たのか、と聞かれれば一つしかない。
アレムの家でニュースを確認していたのは、何も『祭合旅行』について調べたかったからではない。

ウィルス情報を知りたかったからだ。

ウィルス情報によれば、「『ジェネラルショッピングシティ』上空、ウェーブロード広場でウィルスの大量発生を確認した為、近づかないでください」、との事だ。

恐らく、『ゼロラグナ』やら『サテラポリス』やらがこういった事に対処するのだろうが、行かずにはいられなかった。

くだらない正義感などではない。

この前のラファエルのように、ボロ負けしたくはないからだ。

――――――

そんな訳で、カオスはダークソードを構えている。

ウィルスカウンター――近辺に居るウィルスの数を示すソフトだ――が示す数は、八六体。
『グレイブ』の幹部として、もっと多くのウィルスやウィザードを相手にした事もある為、これぐらいでは動じない。

ダークソードを構え、カオスは深呼吸した。
カオスは平均的な小学生の体よりも、明らかに筋肉が無い為、急に運動するとスタミナが切れてしまうのだ。

次の瞬間、ウィルスの軍勢へ剣が叩き込まれた。

ダークソードというのは内に中々の量の電波を溜め込んでいる為、容易に衝撃波を生み出す事が出来る。
どちらかといえば、集団戦の方が得意なのだ。

一振りするだけで黒き衝撃波がウィルスへと突っ込み、守る術を持たないウィルス達は砕けていく。
時たま強いウィルスを見かける事もあって、捕獲しようとも思ったのだが――何せ、カオスはジャミンガーだ――今のウィルスにも何故だか愛着が沸いているので、捕獲はしなかった。

ウィルス総数が七三になった所で、カオスは異変を感じた。
自分が攻撃しなくとも、ウィルスカウンターが減少している。

面白い、とカオスは小さく呟いた。

どうやら、自分以外にもこの群集と戦っている馬鹿がいるようだ。
サテラポリスか、ゼロラグナかは知らない。
それでも、面白いと、カオスは自然に思った。

「アッハッハー！！　特訓を妨害されているってのに、気分が良いぞッ！！」

狂気すら含んだ声が、響き渡る。
黒き猟犬の再起動だ。

27：　血の爆発

ダークソードが振るわれ、衝撃波と共にウィルスが弾ける。

『ウィルス――５０……４６……』

共闘者の方は火力が低いらしく、あまり倒せていないようだ。
カオスのダークソードが振るわれ、衝撃波が飛ぶ。
ウィルスは成す術も無く、弾け飛んだ。

『ウィルス――４５……４２……』

一方的にダークソードを振るっているだけだが、カオスは確かな向上を感じ取っていた。
『グレイブ』の幹部として戦った時の感覚が徐々に戻ってくる。
体が大分慣れてきたのか、ダークソードの動きが細やかになる。

『ウィルス――４０……３６……』

体の内から湧き出る冷たい『ナニカ』を、カオスは感じ取っていた。
『グレイブ』の幹部として築き上げた、血に塗れた『ナニカ』が蘇る。

『ウィルス――３０……２８……』

それは『残虐』だった。
それは『殺戮』だった。

一度闇に溺れてしまったカオスは、二度と戻れない。
その事を自覚しつつも、カオスはヘルプ達の居る光に留まり続ける。

『ウィルス――２０……１５……』

気分は悪いとも良いとも言えなかった。
ただ、圧倒的な殺戮があった。

しかし、ウィルス側に一方的に死なれても困る。
少しばかり楽しませてもらわないと、カオスとしても退屈してしま

うのだ。
これ以上続けていても進展は無さそうだし、と、カオスはダークソードに力を込めた。

『グレイブ』は数々の違法カードや残虐な戦法を扱っている。
残虐な戦法――相手を一方的に潰し、圧倒的な傷を負わせる。

その戦法の中からカオスが選択したのは、『ブラッドボルカニック』だ。
通常のボルカニックとは違い、ブラッドボルカニックは自分を傷付けない。
『グレイブ』が独自に開発した、電波構成の薄い膜を爆発と同時に自分に纏わせる事で、ダメージを無くすのだ。

『ウィルス――12……10……』

そうと決まれば、素早くやってしまおう。
ダークソードに己の電波を送り込む。
目で見なくとも、ダークソードが膨張していくのが分かった。
それと同時に、知らず知らずの内に扱えていた『暗黒電波』を使って膜を作り出す。

何もかもが、爆発した。

『ウィルス――……0』

ウィルスオールデリートが告げられ、カオスはつまらなそうに舌打ちした。
煙の向こう側から、悲鳴が聞こえてくる。

恐らくは共闘者の物だろう。

戦場に立ったからには、それなりの傷を覚悟しておくべきだ。
悲鳴を上げるなど、もっての他――覚悟が足りていない証だ。

カオスは煙の向こうをしばらく見つめた後、静かに背を向けた。

空は、徐々に暗闇へと向かっていた。

28：騒動終了

『ジェネラルショッピングシティ』でのウィルス騒動から一日が経過した。
どうやら、今日はアレムの仕事も休みなようで、家に留まっていた。
リビングの壁間際で浮遊するディスプレイ――テレビである――が、ニュースをやっている。
何でも、昨日はウィルス騒動が三箇所で同時に起きていたらしい。
『ジェネラルショッピングシティ』での騒ぎもそれに含まれているようだ。

適当に菓子を啄(つい)ばむヘルプを横目に見ながら、カオスは口を開いた。

「で、仕事は順調なのか？」
「まぁな。　忙しいけど、上手く行ってるよ――それよりも、お前はいい加減金払うの止めろ。　俺がお前を養うと言っているんだから――」
「無償で養ってもらう訳にもいかないんでな。　それに、幾ら払っても金は無くならない。　俺の財産ナメてんのか」
「……その財産が犯罪によって手に入れた物、ってのがなぁ……」

アレムの独り言を無視し、カオスは立ち上がった。

「……そうだ。　カオス」
「あ？」

アレムに呼び止められ、カオスは動きを止める。
首だけを若干後ろへ向け、言葉を待った。

「……『祭合旅行』ってあるだろ？　せっかくだから、連れて行ってやろうと思ってな」
「いや、面倒――」

『行きます、行きます！　是非行かせてください！！』

面倒臭い、と断ろうとしたカオスだったのだが、ヘルプが即答してしまった。
カオスは溜息を付いた後、二人に背を向ける。

「チッ、ヘルプが行くっていうなら俺も行く。　置いていかれるのも嫌だしな」

２８：　騒動終了（後書き）

ここから先は、ベガの方に更新を集中するので、コチラは更新できなくなるかもです。
何せ、コッチだと日常を描きづらいので……。

29：　フェスティバル　――プロローグ

九月下旬。

『祭合旅行』前夜である。

世間一般では『祭合』と呼ばれているのだが――何せ、大人達は祭りを楽しむだけで、旅行する訳ではないからだ――、カオスとヘルプはアレムのおかげで宿に泊まる事になっている。

宿の名前は『アンダーグラウンド』。

ネーミングセンスを疑ってしまうが、そういう名前なのだから仕方が無い。

カオスはリアルウェーブの調整を行いながらも、近づいてくるヘルプを鬱陶しそうな様子で、左手を使って遠ざける。

どうやら、ヘルプはカオスの持っている『おやつ』が欲しいらしい。

ここで食べてしまっては三日分のおやつが消えてしまう訳なのだが、ヘルプはそんな事お構い無しだ。

「で、出発はいつだ？」

「明日の七時、だな」

ヘルプの存在など無視し、カオスはアレムに問いかける。

返ってきた答えに別段返事もせず、カオスはリアルウェーブの調整を続けた。

３０：　フェスティバル　――参加

九月下旬。
ＴＫシティにて、『祭合』が開催された。

ニホン最大の祭りとだけあってか、この祭りの為だけに海外から来る人も居る。
海外でもそういった扱いを受けているのだから、国内になるとそれ以上の規模で人間が移動する。
つまり、全方位に人混みが広がる訳だ。

人混みが嫌いなカオスにとって、これはマズイ。

オレンジジュースと味噌汁を混ぜるよりもマズイ。

「だー……何だ、コレは。　俺達はアリの巣にでも迷い込んだのかよ」
「ハハッ！　そう言うなって！　しばらくすれば、感覚が麻痺するから、人混みなんて気にならなくなるぞ」

余計に問題じゃねぇか、とカオスは頭の中で突っ込む。
カオスの隣を浮遊する半ウィザード状態なヘルプは、ひたすら目を輝かせていた。
寝不足気味な人が朝早く起きた時よりも、酷い顔をしているカオスとは正反対に、だ。

とにかく、ヘルプの顔全体が輝き出しそうな勢いである。

『ス、スゴイです！！　コレが祭合なんですね！！』
「ったく、こんなので良くハシャげるな……」
カオスが呆れると同時、アレムのハンターが鳴った。
特別な機能を搭載しているらしく、自動的にディスプレイが出現し、見やすいようにアレムの顔の前へと移動した。
そこに表示されていたのは、簡単な文字だった。

『Eエリアの警備を頼む』

それを見たアレムは予想通りだな、といった表情をすると、髪を掻いた。

「すまないな、仕事だ」
「……この地獄に、俺とヘルプを残していくのかよ……」
「仕事が終わるのは夜頃だから、それまで適当にフラついていてくれ。　仕事が終わったらメールするから、『アットホテル』に来てくれよ。　じゃっ！」
カオスが口出しする暇は無かった。
鍛え抜かれた足を地面に叩き付けると、圧倒的な早さでアレムは人混みの中へと紛れ込んでしまった。
アレムを再度見つけるのは、中々困難を極めるだろう。
諦めたようにカオスは溜息を付くと、こう言った

「行くぞ。　タコ焼きぐらいは買ってやる」
『あ、ありがとうございます！！　感激です！！』

ただし、とカオスは区切って、こう続けた。

「俺とお前で半分ずつだ」

ぐわあああああ！！　、とヘルプの悲鳴が炸裂する。

――――――

――――

最寄の屋台でタコ焼きを買ったカオスは、別の入れ物にタコ焼きを数個乗せ、ヘルプへと手渡した。
最初は落ち込んでいたヘルプだったが、数秒もすれば嬉しそうにタコ焼きを口の中へと入れた。

しかし、猫舌だったせいもあって、ヘルプは悲鳴を上げる。

『熱い！！　熱ぃいいい！！　あ、新手の罠ですか！？』
「アホか。　冷ましてから食べろ」

『で、でも！　私の胃袋は温度調節を待ちませんよ！！　既に私の胃袋は、限界を迎えています！！』

「知るか、飢えてろ」

ヘルプはブーブーと文句を垂れていたが、やがてタコ焼きを冷ます為に、息を吹きかけ始めた。

それを見たカオスは、幾らか安堵する。

これぐらいの常識すらも身に付けていないとなると、ヘルプは世の中で暮らしていけなくなっていただろう。

「（なぁに変な気分になってんだ、俺は……？）」

自分自身に苛立ちを覚えながらも、カオスはタコ焼きを口に入れる。

「熱っ！！　新手の罠かよ、コレェ！！」

ヘルプからの視線が、ひたすら痛い。

――――――――――――

ギャラクシーの配下かつ、テロッドの部下であるゴウズは己の右腕を眺める。

そこにあるのは、義手だ。
忌々しき流星スバルによって切り落とされた腕を補強する為の、仮の腕だ。

「……チッ、嫌な事思い出しちまったぜ。　さて、と。　『探知機』を作動させますか。　タイムラグがあるとはいえ、別世界のスバルは既にこの世界に落ちているハズだ」

四センチ程の小さなディスプレイが、ゴウズの前に現れる。
そこに記されていたのは、小さな文字だった。

ゴウズはそれに目を走らせる。

そこに書かれていたのは――。

――――――――――――

カオスとヘルプはタコ焼きを食べ終え、――共に猫舌である二人は、大層苦戦した――裏通りへと来ていた。
ヘルプにタコ焼きを奢った代わりとして、カオスは人混みから離れたのだ。
人々の中に居たかったヘルプはこれに反発したが、カオスの「じゃあ、これから先何も奢らんぞ」という言葉で、渋々裏通りへ行く事

を承諾した。

だが、そこにあったのは意外な物だった。

意外どころではない。

どうして、とカオスは思う。
自分は気分転換の為にここに来ていたハズだ。
この後はヘルプにお菓子でも奢ってやろうか、と思っていたハズだ。
一般人も参加可能な『アトラクション』に、ヘルプと一緒に参加しよう、と計画していたハズだ。
Eエリアの警護に当たるアレムに、差し入れを持っていてやろうと考えていたハズだ。

それが、どうして。

それが、どうして――目の前にツンツン頭の茶髪少年が倒れている、なんて超展開になった。

気分は最悪だ。
少年の様子からして、行き倒れという訳でもなさそうだ。
明らかに人為的な気絶である。

ゴリッ……、と、カオスの口から変な音が漏れる。

平和が崩されようとしている事に、怒りを覚えずにはいられなかった。

31：　フェスティバル　――経過

ツンツン頭の少年を起こしてみた所、彼は『星河スバル』と名乗った。
額には緑色のバイザーを掛けており、服装は赤基準だ。
体型は平均よりもやや小柄で、少々細い――カオス程ではないが。

事情を聞いてみた所、やはり人為的な気絶だった。
シグマと名乗る者との戦闘の末『飛ばされ』、知らない内に気を失っていたようなのだ。

それ以上に驚くべきなのは、星河スバルと名乗る人物が「タイムスリップ」能力を有している事だ。
しかし、今現在は何らかのロックを施されてしまっているらしく、「タイムスリップ」能力は使えないらしい。

「ハンター……XG！？」
『どういう事だ……？　俺達は一〇〇年後の世界にもタイムスリップした事はあるが――携帯端末の機能は、これと同じスペックだぞ。
時刻設定によれば、今の時代は五〇年後じゃねぇか……』

カオスの操作した携帯端末を見て、二人が呟く。
一〇〇年後と五〇年後の携帯端末が、ほぼ同じスペックを持っている――常識的に考えれば、有り得ない事だ。

つまり……、とスバルとウォーロックは顔を見合わせる。

「『異世界――ッ！？』」

ほとんど同じタイミングで、二人が叫んだ。

――――――

『推定ポイント五ニ個の内、三ニ番目のポイントに、星河スバル、の反応をキャッチ。　登録人物の一人、混天カオスが共に行動している』

――――――

「――ギャラクシー様の睨んだ通りだな。　まぁ、コッチの方が便利か。　カオスの位置データを検索するだけでスバルの位置を掴めるんだからな。　スバルの位置データを確かめるよりも、コッチの方が早い」

浮遊していたディスプレイが、音も立てずに消滅する。
ゴウズはハンターを腰ホルダーに装着すると、振り向いた。
そこにあるのは、銀色の小さなケーツだ。
左右に取っ手が付いており、どっちでも持てるという親切設計である。
その代償として、引ったくりされやすいのだが。

さて、と……と、ゴウズは静かに起き上がった。
ケーツを左手で持つと、右手を尻ポケットに突っ込んだ。
そこからイヤホンのような物を取り出すと、右耳に装着する。

ザザッ……と、一秒もしない内に、ゴウズの耳へ音が届いた。

『コード０００……イジョウ　ナシ――バトルサポート　ヲ　オコナイマス』

無機質な声を聞きながら、ゴウズは薄く笑った。
彼の目にあるのは、嘲りだ。

「さて、と。　カオスとやら――俺に勝てるかな？」

――――――

時刻は午前九時ピッタリだ。
ツンツン頭の少年、星河スバルとカオスは並行して歩いていた。
カオスは歴史だけでなく、ほとんどの学問に関して素人なので、星河スバルを知らないのも納得できる。
だが、周囲の人々が気付かないのは、さすがに違和感があった。
周囲の人間がスバルに気付かない理由は二つ程。

一つ目が、五〇年も経ったせいで、スバルの印象が薄くなっている事。

二つ目が、この『行事』だ。　祭りに没頭するあまり、人々はスバルの方に目を向けない。

人間の自分勝手さが良く現れている――他人など、一々気に掛けていないのだ。

それと、この世界で活躍したスバルと、このスバルの容姿が若干違っているのも原因の一つと言えるかもしれない。

「……祭、合……か。　この世界の事はキミのおかげで大分分かったけど、こんなに大規模な祭りがあるなんてなぁ……」

異世界から来た、と説明されてもカオスは半信半疑だったのだが――そのくせ、タイムスリップに関しては容易に受け入れてしまっている辺りがカオスらしい――、星河スバルの様子を見る限り、どうやら本当だったみたいだ。

『だぁ！！　ここは未来なんだろ！？　未来にしかない食べ物とかあんだろ！　食わせやがれ！！』

「……カオス君だっけ？　ロックがうるさいから、屋台に連れてってよ！　お願い！！」

星河スバルの携帯端末は時代遅れなハンターＶＧな為、ゼニーを支払う事が出来ない――ハンター内のゼニーデータを読み取る機類がＶＧとＸＧでは違うからだ――。

その為、スバルはカオスに助けを求めたのだ。
カオスは深い溜息を付く。
「（何で、こうも無防備なんだ……俺みたいな危険人物相手に気を抜くと、死ぬぞ？――何なんだ、ったく）」
『どうしたんですか？　カオスさん』
「何でもねぇよ」
くるっ、とカオスは振り向く。
彼の視線の先にあるのは、「泥団子」という屋台だ。
「泥団子」、というのは二二五〇年後の祭りでは定番の食べ物で――林檎飴（リンゴ）や、綿飴（わた）のような物だと考えてくれれば良い――、薄いチョコレートの中にチョコクリームが入っており、更にその中に、グミが入っているといった物だ。
形状は球体である。
だが、名前が行けなかった。
泥団子という名前に、スバルとウォーロックが顔を青くする。
彼らとは正反対に、ヘルプは顔を輝かせていた。
『わぁあああああ！！　泥団子！　泥団子です！！』
「うるせぇ。　テメェの分を買うとは言ってないぞ」

32：フェスティバル　――襲撃

金属製のパックに入った泥団子をスバルとウォーロックに手渡し、カオス達はGエリアへと向かっていた。

ちなみに、泥団子は既に食してある。

Gエリアは基本的に屋台が少なく、人の出入りが極端に無い場所だ。簡単に言ってしまえば、『高級住宅地』である。

Gエリアに設置されたレストランや施設に入るには多額のゼニーが必要となり、セレブ達しか入れないような場所となっている。

カオスが何故そこに向かうのか、と言われれば一つしかない。

ゼニーをたくさん持っているからだ。

スバル達を元の世界に戻す為の案を立てるには、人混みは集中力を削られる為、相応しくない。

人が少ないGエリアに向かった方が得策なのだ。

――――――――

元『メイン』のメンバー、アープは泥団子を口に入れた。

チョコ特有の味が口の中に染み込み、若干の苦味を感じてしまう。

大抵の人はグミやクリームを楽しむ為に泥団子をチビチビ食べていくものだが、アープは一気食い派だ。
一遍(いっぺん)に多数の味を味わえる、これ程魅力的な事があるだろうか――、とアープは考えているのだが、仲間達からは冷ややかな視線を送られるだけだった。

「にしても、さ」

仲間の一人、ソーデンが切り出す。
何だよ、と単調な返事をしたアープに、次の言葉が飛んだ。

「皆、どこ行ったんだろうな」
「――、」

皆、とは『メイン』のメンバーだ。
混天カオスによって壊滅させられた『メイン』は、今や散り散りとなっていた。

アープはそれぞれが元の生活に戻ったのでは、と考えているのだが、その線は薄い。
何せ、『メイン』のメンバー達が『社会』に抱く執念とはそう簡単に拭える物では無いのだから。

「さぁな。　とにかく、俺達は祭りを満喫しようぜ」

――

カオス達はGエリアの一角にある、『憩いの場』に腰掛けていた。
『憩いの場』は開放的な広場の中に、椅子と机が浮遊している――
といった物だ。
何でも、セレブ達を休ませる為にある物らしい。
当然、入るだけで膨大なゼニーを要求される訳だが、そこは元『グレイブ』の幹部――ちょろい物である。
合計で五万ゼニー程掛かった高級品のジュースと食事を頬張りながら、カオスが切り出す。

「で、お前達の世界に戻る方法とかは考えてるのか？」

対するスバルの方も、ジュースを口に含む。
『高級素材です』、と自己主張しているサンドイッチに伸ばしかけた腕を止め、スバルは返した。

「……全く考えてないよ……。　その、さっきも言った通り、シグマって奴にいきなりワープホールに押し込められたんだ。　ワープホールの出現方法も一切分からないし――」

「チッ……だが、帰る方法はあるハズだ。　行く方法があるなら、当然その逆もあるからな」

再びジュースへ手を伸ばしたカオスだったが、彼の肩に手が置かれ

――

た。
伸ばしかけた手を引っ込め、左へ顔を捻る。
そこに居たのは、十六前後の少年だった。
「失礼。　星河スバルという人を知らないかな？」
「――知らねぇな」
青髪の少年はカオスの答えに薄く笑った。
「そうか。　なら、文句はねぇ――よな！！」
ゴキンッ！！　と、カオスを鈍い痛みが襲った。
次の瞬間、浮遊していた椅子ごとカオスの体が吹き飛ばされる。
ヘルプとスバルの短い悲鳴が響き、ウォーロックがビーストスイングの構えに入る。
衝撃のせいか、胸の辺りに圧迫感を覚えながらもカオスは立ち上がった。
どうやら、肩の辺りを殴られたらしい。
少年の方は既に電波変換を完了している――ただの拳にしては威力が強いと思ったら、そういう事だったのだ。
ただし、相手は本気を出していない。
電波人間の本気の拳を喰らっていたら、カオスの肩は潰れていたはずだ。
そこまで分析して、カオスはハンターに手を伸ばした。

コードを入力し、ウィルスとの融合の準備を整える。

「……俺の名前はゴウズ。　さて、お前に話がある訳だ――星河スバルとウォーロックをコチラに差し出せ。　お前に用は無いんだ」

「――応じると思うか」

瞬間、カオスを鈍い光が包み込む。
ゴウズが薄く笑い、片手をデストロイアッパーに変形させた。

「スバル！　電波変換は出来るか！？」
「出来るよ！！」

「ヘルプを守ってろ！！　コイツは俺が片付ける！！」

極限までに歴史に疎いカオスは、スバルの実力が分からなかったのだろう。
スバルとの会話で、彼の戦闘能力が弱いと判断し、比較的簡単なヘルプの守護を依頼した。

「そうか――だったら、デリートさせてもらうぞ。　俺は特別な能力も何も無いが――楽しませる事ぐらいは出来ると思うぞ」

ダークソードとデストロイアッパーが、轟音を立てて交差する。

33：フェスティバル　――戦闘

『憩いの場』に浮遊していた電灯が弾け飛ぶ。
空気を切り裂き、ゴウズの左腕にダークソードが向かった。

「ハッ！　単調すぎるね！！」

ゴウズの左腕を分厚いアーマーが覆い、ダークソードを弾き返した。
何の前触れも無く出現したアーマーにカオスが驚くが、戦闘という物に休憩は無い。

電波を溜め込んだゴウズの足が、恐ろしい速度でカオスの腹部へ突き刺さる。
肺の中の空気が一気に放出され、カオスの体が真上に四メートルも吹き飛んだ。
その衝撃で、カオスが先程まで立っていた地面が抉れる。

四メートル上空で回転し、カオスの体が一直線に落下する。
まるで、流れ星だ。

「――っふ！！」

ゴウズが息を吐き、落下したカオスの腹部へ拳を叩き込んだ。
落下中だったのも相まって、カオスの体が大きな衝撃に包まれる。

「――ッぐ！？」

声は上げられなかった。
ゴウズがカオスを地面に蹴り落とし、その顔面にデストロイアッパ

ーを叩き込んだからだ。
電撃に弾かれたように何度もバウンドし、カオスの体が『憩いの場』の最奥部に衝突した。
壁が砕かれ、リアルウェーブが緊急消滅する。

「いいザマだな――っと！！」

ゴウズの義手がシステムを起動し、恐ろしい速度でカオスの顔面に拳を叩き込んだ。
絶叫は、声にならなかった。
ヘルメットの右側が砕け散り、右頭部と右目が露になる。
攻撃はそれだけに終わらず、更にゴウズが拳を構えた。

「ふっ！！！」

ガンッ！！　と、ゴウズの拳がカオスの肩に叩き込まれた。
カオスの体は支えを無くし、物凄い勢いで吹き飛ぶ。
地面に体が擦れ、何度も音が鳴った。
もはや立ち上がる力すら無くしたカオスに迫るゴウズは、口元に笑みを浮かべていた。

「じゃ、召されてくれよ」
「ッ――！？」

拳の周囲に電波の嵐が巻き起こり、金属音を鳴らした。
そのまま拳が振るわれ、カオスにトドメを刺した――かと思われたのだが。

カオスは、近くにあったリアルウェーブの残骸を支えとする事で、何とか立ち上がっていた。
ゴウズの目が、驚きに見開かれる。

「――拳は直撃したハズだぞ」
「聞いた事無いか？　『グレイブ』って組織と、そこで行われた『闇の体験』って実験を」

「――ッ！」

「力を欲した俺は、『グレイブ』の幹部となり、そこで行われた実験の被験者となった。　別に抵抗は無かった。　その実験さえ終えてしまえば、圧倒的な力を手に入れられるんだからな」

「――確か、電波核に暗黒電波を注入し、電波核をそれに対応させる事によって暗黒電波を制御する、といった物だったか？」

ゴウズの声に、カオスは頷いて見せた。

「その通りだ。　『グレイブ』の『偉大なる目的』の為には、どうも『闇の体験』による暗黒電波制御者が必要なみたいでな。　それに最も適した体質をしていたのが、俺という訳さ――それと、言っておく。　戦場での油断は死を招くぞ」

暗黒電波を使ってカオスは拳を防いだ、とゴウズが認識すると同時、ゴウズのヘルメットが叩き割られた。
リアルウェーブの残骸が力一杯振り下ろされ、ゴウズの体へ衝撃を

伝える。

「あ、がっ――！？」

リアルウェーブの残骸が、再度振り下ろされる。
あまりの衝撃に耐えかねたのか、柱のような形をした残骸の方が砕け散った。
ゴウズの体が吹き飛び、完全に電波変換が解除される。
観賞用の池に突っ込み、寒気を覚える事となった。

「さて。　教えてもらおうか――何でお前が、俺達を襲ったのかについて」

ゴウズの喉にダークソードを突きつけ、彼の目を見下ろす。
観念したのか、ゴウズは小さな笑みを見せた。

「教えてやるよ――お前達が読めるならな！！」

ゴウズが取り出したのは、青色のハンターだった。
カオスが手を伸ばすよりも早く、ゴウズはハンター内のデータを削除していく。

「チッ！！」

ゴウズを蹴り飛ばし、ハンターを左腕で取り上げる。
ハンターを覗き込むが、九割方のデータが消滅していた。

「ちくしょう！！　だが、まだ読み取れるな――！！」

ハンターのボタンを押し、即座にディスプレイを表示させ、そこに書かれていた文字を読み取る。

『『青色の捕獲部隊（ロックマン・ハンティング）』の最重要項目は、星河スバルとウォーロックの捕獲である。　尚、グローリーとラスターの方は『紫色の捕獲部隊（タイム・ハンティング）』に任せる物とする。　『ゴール』であるギャラクシー様の下に、スバルとウォーロックを届ければいい。　尚、約三箇所の『キー』は『青色の捕獲部隊（ロックマン・ハンティング）』と『配達守護人（デリバリーキーパー）』共同でギャラクシー様に届ける。　星河スバルとウォーロックに遭遇する人物としては、混天カオスの可能性が高い。　もしもカオスが同行していた場合は、彼を潰せ。　ただし、殺す事は――』

データが途切れていた。

そして、大体の事情は察した。
星河スバルとウォーロックは『ロックマン』と呼ばれており、それらを捕獲する為に専門の部隊が動いている。
それを動かしているのがギャラクシーと呼ばれる人物で、このような部隊は他にも存在するらしいのだ。
『配達』、という言葉からして、『ゴール』であるギャラクシーに『キー』を届ける必要があるらしい。

捕獲部隊と守護者が同時に動いている所を見ると、どうやら捕獲部隊の方はスバル捕獲と守護サポートの両方が居るらしい。

カオスは舌打ちして、スバル達の方へ振り返った。
怖がるヘルプを守護する彼を、真っ直ぐに見据える。

やらせる訳にはいかない。

「ギャラクシー、か。　どんなヤツかは知らないが――――お前は俺が潰す」

34：　フェスティバル　――Nエリア

カオス達は小型カーを使い、Nエリアへと移動していた。
ここでも祭りが行われており、ハッキリ言って頭が痛い。

カオスの手の中にあるのは、先程ゴウズから奪い取ったイヤホンだ。
ゴウズの姿は見つからなかった為、身柄を拘束する事は出来なかった。

イヤホンのデータは外部からの遠隔操作によって消えており、『コード』が残るのみ――。
カオス達に『コード』を解析する能力は無いので、イヤホンは完全な役立たずとなった。

だが、コチラ側がスバルと行動している限りは、敵も自分達を狙う。
敵を倒して情報を聞き出せば済む事だ。
敵がいつ現れるか分からない為、人の多い所に居るのは気が引けたが、Nエリアを通らないといけない事情がある。

カオス達が目指しているのはOエリアで、そこに行くのにはNエリアを突破しなくてはならない。
何せ、Oエリアにはバス停や駅が無いからだ。

そんな訳で、彼らは人混みの中を鬱陶しそうに走っている。

――――――

――

元『メイン』、アープ達は小型カーを使ってＮエリアに到着した。
何でも、このエリアはお土産が豊富らしい。
お土産に目が無いソーデンの要望により、こうしてＮエリアへと来た訳だ。

ここらにはオフィスも集中している為、ビルなんかも多い。

人混みはクモの巣のように、ビルの合間に展開される事となっている。
そのせいで屋台も規模が小さくなっていた。
それでも、やはり祭りは祭り――人は嫌でも集まってくる物である。

「あっひゃー！！　人混み凄いな」

アープ達は五人行動を行っており、その内の一人が叫ぶ。
口々に賛同するアープ達は、一先ず手短な屋台へ入る事にした。

――

ビルの合間を抜け、人の合間を抜けてきたカオス達だが、ようやく終わりが見えてきた。
三〇メートル程先に『Ｏエリア』と書かれた浮遊ディスプレイがあるのだ。

幾らか肩の力を抜き、走るのを止めたカオス達。

が、そんな彼らの背後が、爆発した。

「――ッ！？」

悲鳴に釣られるように、一般人は既に避難を開始している。
相当なパニック状態だが、爆発地点に近い人間は一人もいなかった。
爆発周囲三メートル、という小さな規模だったというのもある。

煙の中から現れたのは、黄色装束に身を包んだ少年だった。
黒髪は後ろに流れており、少年の青い瞳がカオスを捉える。

身構えるカオスを見て、スバルも構えた。

ヘルプは既にハンターへの避難を済ませてある。

「――『青色の捕獲部隊（ロックマン・ハンティング）』って言えば分かる、か？……俺の名前はヒット。　悪いけど、コッチも色々と急いでるんだ。　手短に済ませてほしい――というよりも、出来るなら誰も傷付けたくないし、戦いたくない。　お願いだから、スバルを渡してくれ。　スバルにも危害は加えない、絶対だ」

信じられる物か。
例えその言葉は本当だとしても、引き渡せる物か。

「断る」
「、くっ――」

ヒットの表情が歪むと同時、彼の隣に新たな人物が現れる。
青系の装束を纏った金髪の少女だった。

「不意打ちすれば終わったものの……ホント、バカね。　いいわよ、ワタシも手伝ってあげる」
「――卑怯だろ、そんなの」

ヒットの言葉に、少女は笑った。

「何を言ってるの？　アッチは二人、コッチも二人よ。　何も卑怯じゃない――――おっと、自己紹介が遅れたわね。　ワタシの名前はミネ。　真面目にやらないと、無事ではいられないわヨ」

ふざけた口調で話すミネだが、彼女の醸し出す殺気は尋常な物ではない。
『グレイブ』の隊員が放つような、『闇』側の世界の物だ。

戦闘の邪魔だと判断したのか、カオスはイヤホンを足で踏み潰す。
その上で、素早くハンターを抜き取った。
赤色の光がカオスを包み、ウィルス融合を果たす。
それを見たスバルもハンターを引き抜き、ウォーロックと融合を果たした。

そこで、カオスは気付く。
二人の右耳にも、イヤホンが差し込んである事に。

「（あのイヤホン、単なるデータ保管所って訳でもなさそーだな）」

思考が中断される。
轟！！　と、剣がカオスの耳部分を切り裂いたからだ。

耳をガードするアーマーから、粒子が飛ぶ。

「だから言ったでしょう？　真面目にやらないと、って」

いつの間にか目の前に居たミネが、薄く笑った。

35：フェスティバル　――鉄球

カオスは息を呑む。
近距離に剣を構えられている為、迂闊に動けないのだ。
恐らく、一歩でも動けばミネはカオスを刺すだろう。

沈黙が、続いた。

周囲の人々も外のエリアに逃げてしまったのか、話し声すら聞こえない。
精々、宣伝や注意を呼び掛けるディスプレイが音声を発している程度だ。

張り巡らせたクモの糸のように脆い沈黙だった。

が、次の瞬間、莫大な音が轟く。

星河スバル――。いや、ロックマンが物凄いスピードでミネの背後に現れ、ブレイクサーベルでミネの背を斬った音だ。

常識を超越した移動速度は、ジェットアタックによって引き起こされた物だった。
バトルカードの扱いに長けたロックマンだからこそ成し遂げられた速度である。

「――ッ！」

激痛に顔をしかめ、ミネがカオスから離れる。
それを逃さず、ダークソードがミネの胴体を斜めに斬り上げた。
粒子が舞う。

ミネの絶叫がその場に轟いた。
舌打ちし、ヒットがミネを後ろに引っ張る。
ミネの体が投げ出され、地面と擦れ合う。
何度かバウンドし、五メートル程進んだ所で勢いが止まった。
いくら助ける為とはいえ、手法が荒い。
ヒットは片腕を振り上げ、巨大な鉄球を作り上げた。
恐らく、鉄球はヒットの能力なのだろう。
鉄球が大きく振りかざされ、カオスへと迫る。

「うぉァ！！」

カオスと鉄球の間に割り込んだロックマンが、グレートアックスを振り回す。
鉄球が真っ二つに切断され、停止した。
次の瞬間、バォォ！！　というエンジン音にも似た音を立て、鉄球が破裂した。
破片が飛び散るが、電波人間とジャミンガーはそれぐらいでは止まらない。

ヒットが高速でぶれ、カオスの姿も同時に消える。

鉄球が遅れて出現し、ロックマンへと射出された。
対するロックマンもグレートアックスを振り上げ、鉄球を粉砕する。

しかし、鉄球の中からミサイルが出現した。

ギガカードである『エンドミサイル』はロックマンを標的とし、風を切って進む。

「ぐっ――キャノン！　キャノン！　キャノン！　ギャラクシーアドバンス！　インパクトキャノン！！」

特大級の砲撃が射出される。
この時代ではインパクトキャノンよりも強力なキャノンが存在するのだが、ロックマンが放ったインパクトキャノンは上位のキャノンの威力すら超えていた。

それが、ロックマンという英雄の実力だ。

光の砲弾に包まれ、ミサイルが爆破する。
内から外へ、だ。

破片が飛び散るが、やはりこれも無視されている。

一方、空中ではカオスとヒットが高速戦闘を繰り広げていた。

電波人間がギリギリで出来るスピードの物だ。
このスピードを超えてしまうと、体が崩壊しないようにする技術が必要となってくる。

鉄球とダークソードが衝突し、双方が砕ける。

ヒットは腕を振り上げ、更に鉄球を射出した。
今までの鉄球と比べ、かなり小さい――野球ボール程だ。

ダークソードが、またもや鉄球を粉砕する。
それを見て、カオスが呟いた。

「お前の能力……鉄球を作り出すだけじゃなく、それを打ち出す物だな」

「気付いたか。　だが、――それだけじゃない！！」

鉄球が射出された。
うんざりしながらも鉄球を粉砕したカオスは、目を見開く事となる。

鉄球の中から、ミサイルが現れたのだ。

慌てて暗黒電波で防壁を作り出し、ミサイルを弾く。
だが、『闇の体験』によって無理やり暗黒電波に適合させている為、カオスの体から粒子が溢れた。
少量だが、痛い事には変わり無い。

「チッ――。　お前、鉄球が能力じゃないのか……」

「もうそこまで気付いたのか。　早いな」

「あぁ、もう気付いた――お前の能力はリアルウェーブの作成、及びそれの制御だろう」

「――早いな。本当に」

カオスの言葉に、ヒットは短く答えた。

ヒットの能力は、通常ならハンターを使わないと作成できないリアルウェーブを作成する物だ。
作成したリアルウェーブは当然、自分の波長とピッタリ合っている為、それを制御する事も可能なのだ。

つまり、ヒットは自由にウェーブカードを作り出す事が出来る、という事だ。

これを知ったら、全国のウェーブカード職人が泣き出しそうな物である。

ただし、リアルウェーブを作成できるといっても限度がある。
自分の電波にも限界があるし、何よりもコントロール出来る容量という物がある。
恐らく、ヒットの限界容量はミサイルなのだろう。

ミサイルを作り出した直後で若干疲労している事からもそれは伺える。

「うぉァ！！」

ヒットが叫び、鉄球が射出される。
今度は小細工無しの、純粋な鉄球だ。
ただし、十数個にも渡る鉄球が、同時に浮遊している。

ヒットが片腕を振ると同時、それらは一斉に射出された。
そう、カオスに向かって。

「チッ――――わんさか、わんさかと……雑草みたいだな、オイ！！」

叫び、ダークソードを振り上げる。

ただし、ダークソードは空中分解し、紫色の電波となって宙を舞った。
それを起爆剤とし、カオスは暗黒電波を練る。

そして、カオスの周囲が爆発した。

『ブラッドボルカニック』によって、周辺が爆風に包まれていく。
ただし、カオス自身は暗黒電波による防御によって、ダメージを負わない。

鉄球が全て破裂し、破片がまとめてヒットへと降り注いだ。
鉄球一個分の破片なら無視できる。
ただし、それが十数個分だと――結果は言うまでもない。

「ァァァァァァァァァァァァォおおおおおおおおおおお！！！」

絶叫が轟き、ヒットの姿が消えた。
危機を感じて、撤退したのだろう。
彼の立っていた場所には、水溜りのような量の血があった。

３５：　フェスティバル　――鉄球（後書き）

次回はスバルＶＳミネです！

36：フェスティバル　――投げ

特大級のシャボン玉を黒くし、硬くしたような形をしていた鉄球を破壊し、ロックマンは顔を上げた。途中でニ～三個程の鉄球が接近してきたのだが、インパクトキャノンによって粉砕する。破片が舞ったが、ロックマンは一々気にしていない。

そんな彼が見たのは、爆発だった。

ウェーブロード上で起こった爆発と、鉄球が衝突している。

周波数の質からして、ヒットとカオスなのは間違いないだろう。

そして、同時に驚いていた。

この世界の電波人間は自爆すらするのかと。

容易に自爆するハズもないので、カオスも何らかの対策を用意してあるのだろう――そう考えていたロックマンは、特にカオスの命を心配していない。

自爆よりも心配するべきなのが、戦闘だ。

カオスがやられるとしたら、恐らくは戦闘だろう――自爆で死ぬなど間抜けすぎるので、やるハズが無い――ヒットの技量がどれ程かは分からないが、このまま戦闘が長引けばカオスも疲労するに違いない。

そう踏んだロックマンは援護しようと構えたのだが――最も、カオスとヒットの戦いは終わっているが――、そこで背中に強い衝撃を受けた。

鈍器を思いっ切り振り下ろされたような痛みが、背中を中心として広がる。
重心が前に傾き、体が倒れていった。
地面と衝突する前に誰かの腕がロックマンの胸を掴み、立ち上がらせた――のではなく、ロックマンの体を支えるとそのまま蹴りを加えたのだ。
「がはァッ！？」
ほとんど状況を理解できないままに、ロックマンは吹き飛ばされる。
『恵那木大学（えなきだいがく）』の生徒が作った屋台に突っ込み、派手に商品をばら撒いた。
物品の中から這い上がろうとするロックマンだが、相手はそれを待たない。
ヒートアッパーが、ロックマンの顔面に直撃した。
金属同士が衝突したような、不快音が響く。
一瞬ロックマンの動きが止まった後、何かに弾かれたように吹き飛んだ。
オフィスビルの表面にクレーターを作り、ロックマンの体が衝突する。
相手はそれを見ると、ゆっくりと近づいてきた。
余裕を感じさせる、ナメた足取りで。
「ご機嫌はどーぉ？　さっさと気絶させてギャラクシー様の所へ運んでやりたいんだけど、遺言とかってあるかな？　んぅ？」

ミネだった。
薄緑と黄色を基準としたアーマーに身を包み、嫌らしい笑みを浮かべる少女だった。

「う、が――ッ」

あまりの衝撃のせいで呼吸も苦しいロックマンの口から漏れたのは、呻き声だった。
ミネはロックマンの目の前で足を止める。
人型の影が、ロックマンの体を覆い尽くした。

「それが遺言ってワケね。　じゃあ――――ライド・オンと行きましょうか。　楽しい楽しいウェーブバトルが始まるわヨ」

直後、鈍い音が炸裂した。
見れば、ロックマンの腹部がへこんでいる。

『スバルッ！！　スバルッ、オイ、大丈夫か！？』

ロックマンはウォーロックの問いに答えられない。
痛みのせいだ。

ミネがやったのは、非常に簡単な事だ。
アイススピニングを手に取り、それをロックマンの腹部へと投げ下ろしたのである。

それだけなら、ダメージは少ないだろう。
ただし、ミネの能力が加われば別である。

「ほぉーら、二発目だよーん」

ふざけた口調のミネは、ひたすら楽しんでいる。
ロックマンを痛め付ける、という行為自体を。

ギャラクシーの下で育ってしまったのだから、仕方の無い事なのかもしれない。

アイススピニングが投げ落とされ、ロックマンの絶叫が響き渡った。

３６：　フェスティバル　――投げ（後書き）

ミネの能力は、上手く進めば次話で説明できる……ハズです。

37：フェスティバル　――漆黒の速度（前書き）

↓↓↓↓↓1↑↑↑↑↑

Nエリアを衝撃が襲った。
地震にも等しい衝撃だ。

避難が遅れた。

アープはそう思う。
既に周辺には防衛用のリアルウェーブバリアが展開されており、Nエリアからは出れない。

自動的に展開するバリアもどうなのか、と考える。
内部に人間が取り残されているのに展開されてしまうのだから、笑えない。
だが、アープが激昂する理由は他にある。

彼の仲間の腹部からは、血が溢れていた。
それも、決して少ない量の……だ。
ハンターの治療機能で仲間の傷を治しているが、アープ達にはそう

いった知識が一切無い。
おかげで、仲間の傷は少しずつしか塞がっていなかった。

そして、アープは捉えてしまった。

仲間が攻撃を受けた際、ダークソードを構えていたカオスを。

……どういう事だ、とアープは歯を食いしばる。

確かに、『メイン』はカオスに危害を加えた。
だが、カオスだって仲間を傷付けられたから迎撃を行ったのだ。

それが、どういう事だ。

自分は散々綺麗事を吐いたくせに、『メイン』と同じ事を――いや、無力な人間を殺そうとしたのだから、それ以上の事を――行っている。

あの事件はコチラに非があった。
だが、それをいつまでもズルズルと引きずるのは違う。

何よりも、電波変換すらしていなかった人間を傷つけたのがムカつく。
これだから電波人間は嫌なのだ。

自分達は優越な立場に浸かり、電波変換できない人々の事などこれぽっちも考えていない。

……これ以上、アイツが自分の仲間を傷付けるというのなら――

――もう、容赦はしない

37：　フェスティバル　――漆黒の速度

ロックマンの意識は薄れていた。
それでも、分かる。

目の前に立つ少女――ミネを倒さない事には、何も進まないと。

静かに、痛みに耐えながらもロックマンが起き上がる。
それを見たミネの顔に、不可解な表情が浮かんだ。

「……まだ立ち上がるの？　勝てるワケ無いのにねぇ……まっ、死にたいならそれでもいいけどォ！！」

ミネの手の中に、アイススピニングが現れる。
一息溜めると、ミネは思いっきりそれを投げた。
対するロックマンは、左手を掲げる。

「ファイナライズ！！　ブラックエース！！」

――――――

カオスはウェーブロード上にいた。
そんな彼の顔は、驚きに支配されている。

彼の視線は地上に集中していた。

「……何だよ、……あれ……」

口調にあるのは、『驚愕』。
これまで幾度と無く奇怪な物を見てきたが、これは格別だ。
本当に現実に起きている事なのか、と己の視界を疑ってしまう。

道路の中央。
そこに、ノイズの塊があった。
正確に言うと、周囲のノイズが一点に集まり、球体と化しているのだ。

そして、驚く事に球体の中には電波人間がいるのだ。

カオスの口が静かに動いた。
紡がれたのは、『ありえない』という言葉だ。

常識人なら誰だってそう思うだろう。

あれだけのノイズを浴びても――いや、それどころかノイズを操っている――平然と立っていられるなど、有り得ないのだ。

カオスは暗黒電波を駆使する事によってノイズを『弾く』事も出来るが、目の前に広がる光景はそれとは違う。正真正銘、ただの電波人間がノイズを制御している。

バンッ！！！　と、風船を割りでもしたような音が響く。
ノイズで構成された球体が弾けた音だ。
四方八方へとノイズが散っていく。

だが、ミネの注目はそこに注がれてはいなかった。

ノイズが散った事によって自身にダメージが行く、という事すら眼中に無い。

そこに立っていたのは、ロックマンだ。
確かにロックマンだ。

だが、違う。違うのだ。
根本的な所が違う。

漆黒のアーマーに黒い翼――驚くべきなのはそこではない。
高出力のノイズを制御し、それを力としている……。

「これがファイナライズ……へぇ、面白いワね……」

そう言うミネだったが、表情に余裕は無い。
焦り、そして恐怖している。

無理も無い。

怪物が目の前に立っているのだから。

『スバル、とっとと片付けちまうぞ！！』
「分かってる！！――――――ふッ！！」

ブラックエースが息を深く吐き出すと同時、彼の姿は消えていた。
いや、そうではない。

正確には、ミネの背後に現れたのだ。

これが『オートロックオン』――ノイズが自動的に狙いを調整し、
的確に攻撃を当てる事が出来る。
瞬間移動はその副産物だ。

ブラックエースの左手には、エドギリブレードが構えられていた。

三枚分の威力――エドギリブレードの特徴は『数』だ。
カードを同時に使った分だけ、エドギリブレード一本の攻撃力が増幅されていく。

「ごっ、はっ――――……ぅァあああああああああ！？」

痛みに早急すぎたせいか、絶叫が遅れていた。
ミネの体が数メートル吹き飛ぶ。
足が道路と接触し、ガリガリと地面が削れた。
彼女が吹き飛ばされた後には、大量の粒子が舞っていた――まるで、雨のようだ。

「くっ、ぁあああああああ！！！」

体勢を立て直したミネは、ほとんどヤケクソ気味にアイススピニングを投げつける。
途中でアイススピニングが不自然な回転をしたが、当然、そんな物はブラックエースに通用しない。

羽根から一筋のノイズが伸ばされ、腕のような動きでアイススピニングを弾く。
バシュッ！！！　と、物凄い勢いで吹き飛ばされたアイススピニングが地面に転がった。
良く見なくとも、アイススピニングは焦げている。

『アイツの能力――』
「……うん。　球体の加速……みたいだね」

自らに触れた『球体』の動きを加速させる。
案外、簡単なトリックだったのだ。
アイススピニング如きが高威力を弾き出せたのも、先程の不自然な回転も、全ては速度が追加されたからだ。

能力を見破られたせいか、ミネの動きが硬直する。

だが、ブラックエースはそれを待たなかった。

彼の翼から、無数のノイズが伸びる。
ウネウネと蠢く棒のような形をしたそれは、ミネを狙って一直線に突っ込んでいく。

あまりに速すぎた。
電波人間ですらも、この速度には追いつけない。
無数のノイズの腕はミネを縛り上げ、ノイズを流し込んでく。
電波人間にとってノイズは毒だ。

「ぐぁアアアアアアあああああああああああああああああ！！！」

絶叫が轟く。
ブラックエースはトドメを差すべく、ソードファイターを構える。
だが、相手の方が早かった。

「ぐ、ぁ――！！」

彼女の体が消える。
周波数転移でもしたのだろう。
ノイズの拘束の中には、誰もいなかった。

――――――

派手な戦闘があったせいか、サテラポリスがエリアを封鎖し、警備にあたっていた。
スバルは電波変換を解き、路地裏に入った先でカオスと再会した。
初めはカオスに『あのノイズは何だ？』、といった事を聞かれたのだが、エースＰＧＭの事を説明したら素直に納得した。
話も一段落付き、カオスが告げる。
「……とっととＯエリアに――」
「待てよ」

声が届いた。
二人の耳に、確かに声が届いた。
それは路地裏の入り口の方からだった。
二人の視線が同時にそちらへと向けられる。

「……待てって言ってるんだ」

若干オレンジ色の掛かった黒髪。
背後には、数人の仲間を連れている。

「……どういう事なのか、説明してもらおうか――クッソ野郎ォオオオオオ！！！」

絶叫し、アープが駆け出す。

38：　フェスティバル　――原始的な拳争い

鈍器で殴られたような衝撃が駆け巡った。
それを認知したと同時、カオスの体が吹き飛ぶ。
路上に倒れたカオスは静かに顔を上げた。

オレンジの掛かった黒髪――確か、犯罪組織『メイン』の一員だったはずだ。

少年は拳を構えていた。
カオスと少年の視線が交差する。

「テメェ――さんざんさんざんさんざん、綺麗事を吐いたクセに……その割には真反対の事をやりやがるな！！」

少年の背後にいる、数人の者達へカオスは視線を移した。
その内の一人が傷を負っているのを見たカオスは、状況を把握した。
そして、誤解されていると分かっていても笑った。

「――小物だな、本当によ」
「あ？」

カオスの呟きに、少年は眉を寄せる。
切り裂くような笑みを見せて、カオスは強く言った。

「お前の考えはちっぽけだって言ってるんだ。　まずは状況を把握

しろ。その上で戦え――全く戦場を理解していないぞ、お前」

それを聞いた少年は何も言わなかった。

ただし、行動で考えを示す。

バガン！！！　と、小気味の良い音と共に、カオスの腹部に拳が突き刺さった。

元々筋肉が無い上に――昔からずっと運動が嫌いなせいだ――、『グレイブ』の実験（パワーアップ）で筋肉が弱まっているカオスの体は、それだけで一メートル吹き飛ばされる。

宣伝ディスプレイに背中を打ち付け、肺の中の酸素が一気に放出される。

息苦しさを認知するよりも早く、少年の拳がカオスの肩にめり込む。

ディスプレイが邪魔しているせいで、カオスの体は吹き飛ばされずにその場に縫い止められた。

――――――

アープはひたすら怒りに身を任せていた。

カオスが強いのは、電波変換時のみだ。

つまり、電波変換さえ封じれば、後は格闘で潰せる。

どんなに凶暴な獣だろうと、牙と足が無ければその強さは発揮されない。

牙と足に相当する電波変換さえ封じてしまえば、後はこっちの物だ――カオスの拳では、アープを倒せない。そして、カオスの体ではアープの拳を防御できない。

非常に原始的な『殴り』を用いて、アープはカオスを傷付けていく。自分の仲間が負った分の傷ぐらいは返さなければならない。

アープは聖人君子では無い。
身内を傷つけたヤツを許せるような、そんな心の広い人間ではない。
報復は当然する。しなくてはならない。

バリンッ！！！！　という音と共に、ディスプレイが砕け散った。
支えを失ったカオスは拳を受け、地面に倒れる。

アープの拳が何度も振るわれたせいで、ディスプレイも限界を超えてしまったのだろう。
だが、アープはそんな事を気にも留めない。

ディスプレイの粒子の中を進み、カオスの胸倉を掴む。
そのまま、自分の首の位置までカオスを持ち上げた。
小学第五学年とは思えない程に、カオスの体は軽い。

だが、アープが驚いたのはそこではない。
ここまでされたカオスが、尚も笑っている事に対して驚いているのだ。

「やっぱり、お前は小物だ」

カオスの発言と同時に、アープの拳が彼の顔面に叩き付けられる。
沈黙だった。
それを見ていた仲間も、スバルも、ウォーロックも、ヘルプも――
誰一人として動こうとはしなかった。

カオスの体が、崩れ落ちる。
路上に倒れた灰色の少年に対し、アープは更に怒りを募らせた。

が、彼の怒りは表へと放出されない。
拳を通してぶつけられない。

何故なら、カオスが起き上がったからだ――これだけの傷を負って、
もやし体型であるカオスが起き上がれるとは思えなかった。

――直後、後方で悲鳴が鳴った。

二人が同時にそちらへと視線を移すと、アープの仲間が倒れ、スバ
ルが壁に押し付けられていた――ソードによって、だ。
そして、そういった現象を引き起こした少年はソードを構えてスバ

ルの首を狙っていた。
スバルを壁に押し付けている少年だ。

藍色基準のアーマー、紫のバイザー……確実に電波人間だ。

「ギャラクシーの計画を潰すのには、これが一番手っ取り早いらしいぜ。　まぁ、アイツの事だからコイツが死んでも計画を修正するらしいが――だが、ギャラクシーの計画にダメージを与える事は出来る」

アープは即座に判断した。
地面に倒れ、呻いている仲間達を傷付けたのは誰なのか――という事を。

「テメェ、誰だよ……」

「さて、俺も忙しいんでな。　とっとと殺して終わりにするか」

「テメェ、誰だって聞いてんだよッ！！！！」

アープの叫びに対し、少年は鬱陶しそうな視線を投げる。

「渡部レート、覚えとけ。　まぁ、この姿の名前はウォット・リウムだがな――あの学校での戦闘でイオンは使い物にならなくなった

し、まぁ……新しいウィザードも使い勝手いいし、俺としてはどうでもいいんだが」

39：　フェスティバル　――ニューマター＝エーテル

渡部レート。
ウォット・リウム。

どうやら、それが少年の名前らしい。
立ち上がったカオスは静かに思考する。
彼の前に立つアープは焦りを隠そうともしない。

「何でテメェは俺の仲間に手ェ出した！！　何が目的だッ！？」

アープが叫ぶ。
彼の怒りの源は傷付き、倒れ、呻く仲間達だ。
理不尽な暴力に対する怒り。

かつて、自分達が電波人間に抱いたのと同じ感情だ。

対するウォット・リウムは、首を傾げてみせる。
両腕を水平に広げた。

「いや、な。悲鳴の合唱でも響かせないと、オマエ達二人には届かないと思ってさ。　相当熱中してただろ、オマエら……まぁ、一言だけ言っておくぜ。　コイツには死んでもらう。　別れの言葉も無しにさよならは嫌だろ？　だから、わざわざコイツに危機が迫っている事を教えてやったんだ」

カオスの視線がスバルへと向かう。

レートの視線も、スバルへと向かっていた。
二人に共通するのは『コイツ』――つまり、スバルだ。
そんな事情も知らないアープは疑問を浮かべる。

（アイツ、どこかで見た事あるような……？　いや、それどころじゃない。どうやら、レートとかいうヤツは俺を他の人と勘違いしているらしいな。　残念ながら、俺はあんなヤツ知らないぞ――とにかく、アイツを倒す事から始めないとな……チッ、カオスとレート……挟み撃ちか。　カオスの援護にでも来やがったのかよ……？）

一から一〇まで状況判断を間違っているアープ。
だが、無理も無い。
カオス＝敵……という観念は消えてくれないのだ。
アープがどういった答えを導き出したのかは分かるだろ。
レートは『コイツ』をアープに対する人質としている。
だが、レートはアープを別人だと勘違いしている――何せ、人質の事をアープは知らないのだ。
そして、レートはカオスの危機に駆けつけたカオスの仲間だ、……と。
だが、早くもその予想は裏切られる事となった。

「うォぁあああああああ！！」

アープが思考している間にジャミンガー化し、リカバリーを施したカオスが駆ける。
浅い傷――電波人間から見れば――だったので、リカバリーで容易に回復する事が出来たのだろう。
カオスを見たレート……いや、ウォット・リウムは浅く笑った。

「来い。楽しませてやる」

スバルの首筋に当てていたソードを放すと、ウォット・リウムは掌を広げた。
ブシュッ！！　と、不気味な音と共に水が生成される。
いや、――生成などという次元ではない。

水が次第に膨れ上がり、事務机並の大きさになった。
津波のように大きく口を開けた水の塊は、カオスを呑み込もうと構える。
対するカオスは、禁止カード……『スパーニング』を入力する。

ジバァァァアア！！！　と、青い雷光が爆発的に広がった。

拡大した花火のような光が辺りに散らばっているのだ。
それを見たアープは避けようとするのだが、何せ速度が速度だ。
いや、その前にアープは人間である――電波人間の戦いに付いて行けという方が無茶だ。

口を大きく開けた水と、帯状の雷光が衝突した。

凄まじい衝撃が広がり、雷撃が水を消す――誰もがそう思っていただろう。

だが、

「そんなチンケな雷光で俺に勝とうとするなよ。これはタダの水じゃねぇんだからよ」

大きく口を開けた水は、――。

雷光を呑み込んだ。

説明不足だろう。そして理解不能だろう。
ただ、こうとしか表わせない。
水が生き物の口のように動き、雷光を呑み込んだ。

そうとしか言い表せない。
そして、雷光は喰われた。

カオスが驚愕に目を見張る。
対するレートは何事も無かったかのように、依然と表情を変えない。
宙に浮いた水は、ゲル状のような気味の悪さを見せ付けている。

レートはカオスの顔を見ると、首を振った。
愉快だ、とでも言うように。

「何だ。シケた面してるな。　何なら教えてやろうか、水の秘密を」

直後。

ウォット・リウムの腕が爆発した。
無数の衝撃波が散らされ、アープの背中がディスプレイに衝突する。
全身に切り傷が入り、生身の人間としては絶叫してしまう程の痛みと化した。

衝撃波の波を暗黒電波防壁で防ぎながらも、カオスはウォット・リウムの腕を注意深く観察する。
煙が晴れ、ウォット・リウムの右腕は――。

「ま、俺の成長度合いじゃコレが限界みたいだな。」

腕を覆う、紫色の膜。

ジジジジ……と、毎秒毎秒、小さな電撃音が鳴っている。
膜は常に変動し続けていた。

まるで、電撃だ。

「このエネルギーを構成しているのは、エーテルって物質らしいな。プルテミーの野郎が俺を成長させる事によって生まれさせた新物質だとさ。　さて、こっからがタネ明かしだ。　エーテルを注ぎ込んだ水は、どうなるでしょーか？　はい、お答えください！」

突然振られたカオスは逡巡（しゅんじゅん）する。
だが、答えは一つしかなかった。
そう、始めから答えは決まっていた。

「……目の前にある光景、」
「正解でーす。　ご景品は――」

狂々とした笑みを浮かべるウォット・リウムは、どこまでも白熱していた。
誰も止めらない、世界ですら止めらない。
そう思わせてしまう程に白熱し、狂々としていた。

「――血みどろの殺戮劇でーす！　さぁさぁ、存分に楽しんじゃってください！！！」

40：　フェスティバル　――ノーマルの再起

「がぁあああああああああああああああああああッ！！！！！？？？」

裏路地に絶叫が響き渡った。
絶叫の主は、ジャミンガーと化した混天カオスだった。
彼の黒い体は酷い量の粒子を撒き散らしており、そして――現在進行形で、宙を舞っていた。
原因はウォット・リウム――。
彼の腕に発生したエーテルの塊から、鞭のような物が伸ばされたのだ。
そして、エーテルの鞭はカオスに叩き付けられ――その結果が、これだ。

派手な音を撒き散らし、カオスは地面に衝突した。
ヘルプの絶叫が場に響くが、それすらもレートの爆笑によって掻き消される。

「ハッハー！！　期待して損しちゃったなァ！！　元『グレイブ』の幹部っつー事で、メチャクチャ期待してたんだがよ……なぁんだ、この程度か」

カオスとレートの戦いを見て、一番驚いているのは当事者達では無い。
物陰に居る高瀬（たかせ）アープだった。

（どういう、事だよ――ッ！？）

引き裂くような笑みを浮かべ、倒れたカオスにゆっくりと迫るウォット・リウムを見て、アープの中に疑問が沸いた。

（アイツは、……カオスは、俺の仲間を傷付けて喜ぶようなヤツじゃなかったのかよ！？　破壊行為を働いて、それで楽しむようなヤツじゃなかったのかよ！？　何で……何で、俺の仲間を攻撃したヤツと戦ってるんだよ……）

そして、疑問は確信へと変わった。

（まさか、俺は……俺は、勘違いを……？）

視線を戻してみれば、先程ウォット・リウムに倒されたハズのツンツン少年が、弱った体を動かして立ち上がろうとしていた。

――クソッ、とアープは毒づく。

彼は一つのチップと、ハンターを取り出した。

「おぉァァァァァァ！！！」

絶叫し、飛び出す彼の体が光に包まれていく。

例え無力でも、やれる事はある。

絶叫に反応したのは、ウォット・リウムだった。
笑みを貼り付けたまま、飛び出したノーマルを睨む。
アープの存在を確認したウォット・リウムの笑みは、より広がった。

「イイねぇ……必死にもがく姿、すっげぇイイぜ！！！」

「おぉおおおおおお！！！」

爆笑するウォット・リウムに対し、アープはソードを構える。
が、それを振り上げる前に動きがあった。
アープを迎撃しようとしたウォット・リウムの左膝に、鋭い刃が突き刺さっていた。
「――ぅがっ！？」
不意打ちだったせいもあり、ウォット・リウムの体がよろめく。
同時に、アープのソードがウォット・リウムの左腕へ、起き上がったカオスが構えたダークソードが腰の辺りへ突き刺さる。
ウォット・リウムの絶叫は声にならなかった。
きっかけを作った本人であるロックマンはその光景に対し、思わず目を伏せてしまう。

４０：　フェスティバル　――ノーマルの再起（後書き）

この小説、一話一話が短い……。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1932j/

chaos――

2010年10月9日23時01分発行